

## ドストエフスキイ研究会便り（7）

### 「一粒の麥」の死の譬え

#### — ユダ的人間論とイワン —

はじめに

「研究会便り」（5）と（6）の二回は、『カラマーゾフの兄弟』の冒頭に置かれた「一粒の麥」の死の譬え（ヨハネ福音書十二24）の検討から入り、そこに存在する「ユダ的人間論」と「キリスト論」の二つの視点を、「相互磔殺」（小出次雄）の概念と共に、原始キリスト教生成のダイナミズムを捉える中心軸と考え、殊にヨハネでは背景に押しやられてしまった「ユダ的人間論」の痕跡を、パウロ書簡を含め新約聖書全体の中に辿りました。

ところで「ユダ的人間論」と「キリスト論」という二つの概念について、これらが厳密な学問的概念であるのか否か、またこれらについての定義・定説が存在するのか否か、残念ながら筆者（芦川）は寡聞にして知りません。しかしそれらの明確な定義の上に論は進められるべきであり、筆者はここで改めて現時点での考えを記しておこうと思います。

「ユダ的人間論」とは、まずは師イエスを裏切り十字架上の死に追いやってしまった弟子たちに目を向け、彼らの罪意識の帰趨を在りのままに捉えることで、広く人間の内に潜む根源的な悪魔性、つまり「聖なるもの」を否定し抹殺し去ろうとする心の闇に目を向け、そこから人間と神とキリストについて広く考えてゆこうとする立場である、このように考えます。他方「キリスト論」とは、何よりも十字架上の死に追いやられたイエスの復活、彼が死を超えた「永遠の生命」を与えられた出来事に決定的な意味を見出し、そこから改めてイエス・キリストを介した神による人間救済の経緯、神の愛と恵みと栄光に目を向け、人間と神とキリストについて広く考えてゆこうとする立場である、このように言い表しておきたいと思います。

これらの定義は、殊に後者はイエスの「復活」をどう捉えるかという問題と関わるため、誰もが納得する十分な定義とはなり得ないでしょう。しかし新約聖書のイエスの出来事に目を向ける時、これら対照的な二つの立場あるいは視点が、我々の目の前に大きく浮かび上がってくることは否定出来ないように思われます。これら二つを踏まえておくことで聖書世界や、それを土台とするドストエフスキイ世界にアプローチするにあたって、我々はバランスのよい、しかも基本的な「思考の参照枠」を与えられることになるでしょう。

例えば『カラマーゾフの兄弟』において、イワンやスメルジャコフについて考える場合、「ユダ的人間論」の角度から見てゆくことで、またゾシマ長老やアリョーシャの場合は、「キリスト論」の角度から光を当てることで、作者ドストエフスキイが提示する彼らの様々な言説や行動が、相当明瞭な輪郭を以って浮かび上がってくるでしょう。勿論、前者と後者とが完全に切り離されているわけではなく、彼らのドラマにおいては、両者が複雑に絡み合って存在するというのが実際の現実です。これら二つの概念・視点とその定義は、飽く

迄も一つの「思考の参照枠」として、考察を進めるべきことは言うまでもありません。

以上のような基本的視野を確認した上で、今回の「研究会便り(7)」では『カラマーゾフの兄弟』の次兄イワンを取り上げ、この青年が辿る「肯定と否定<sup>アフロコントラ</sup>」、「光と闇」のドラマを辿りたいと思います。イワンとは、地上に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちに目を釘付けにされ、「神と不死」を求め「ホザナ！」を叫ぶことを熱望する「ロシアの小僧っ子」であると共に、悪魔の「否定の精神」に魂を委ね、神を否定し「キリストの愛」を斥け、遂には自らを神とする「倨傲の精神」に支配された「叛逆」の思想青年でもあります。このイワンを聖書的磁場に置いて見る時、我々はドストエフスキイがこの青年を現代のユダとして設定し、イエス・キリストの十字架と正面から対決させ、「肯定と否定」との間に魂を分裂させ、その分裂の悲劇を行きつく所まで行きつかせ（「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」と「兄弟殺し」、そしてその末の「死の床」！）、その完膚無き迄の没落の先に、遠く微かにではあれ、復活の光を見出させようとしていることを知るでしょう。

かくして今回のイワン論は、「ユダ的人間論」と「キリスト論」を土台に置き、まずは最初に求道者としてのイワン、「神と不死」を熱烈に探究する「ロシアの小僧っ子」としての肯定的イワン像を確認したいと思います。次にそれとは対照的なイワン、悪魔の「否定の精神」に憑かれた否定的イワン像に焦点を絞ります。イワンと言うと多くの読者や評者が、専ら否定的イワン像の方に焦点を絞ってしまうのですが、ドストエフスキイはイワン造型にあたって、「ユダ的人間論」と「キリスト論」の両軸からイワン像を組み立て、「肯定と否定<sup>アフロコントラ</sup>」二つのイワン像を以って、イワンをイワンたらしめていると考えるべきでしょう。

しかし一度でイワンに関わるドラマの全てを追い、彼が抱える問題の全てを明らかにすることはまず不可能です。今回我々は、これら二つのイワン像を別々に扱うことで、この青年が持つ「光と闇」の両面を際立たせたいと思います。このことから「ユダ的人間論」と「キリスト論」が、「相互磔殺」の概念と共に、聖書世界とドストエフスキイ世界とに分け入る上で、そしてまたイワンを理解する上で、如何に不可欠な概念であるかが確認されるでしょう。ここでは扱い切れない問題、つまり「父親殺し」以降のイワンが捕らわれる罪意識の帰趨と神との出会いの問題については、改めて次回からの「研究会便り」で検討を続ける予定です（『カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々』）。そこではイワンに続き、殊にスメルジャコフに強く焦点を絞り、「父親殺し」を巡る兄弟二人の罪意識精算のドラマを徹底的に追い、それを我々が課題とする新約世界の「ユダ的人間論」の問題、つまりイエスの「十字架の死」以後、師を裏切った弟子たちが、その罪意識を如何に清算させられたのかという問題の検討と解明に繋がりたいと思います。

(2017年3月25日)

(2018年12月、一部加筆修正)

## 「一粒の麥」の死の譬え

### — ユダ的人間論とイワン —

## 第3章. カラマーゾフのユダ・イワン

目次	[ページ]
<b>6. 新約からカラマーゾフの世界へ</b>	3～4
<b>聖俗二つの死</b>	4～5
イワン(一). 「ホザナ！」への希求、ロシアの小僧っ子・イワン	5～14
イワン(二). 「キリストの愛」の否定、ユダ・イワン	14～23
イワン(三). ユダ・イワンの帰郷と挫折	24～29
「悪業への懲罰」	30～31
おわりに	31～32
<b>〈参考文献〉</b> . . . . .	33～34
<b>〈付記〉</b> . . . . .	34～35
<b>〈本論成立の経緯〉</b> . . . . .	35～37

## 6. 新約からカラマーゾフの世界へ

### 様々な問い

「一粒の麥」の死の譬えから出発した我々は、新約聖書が記す十字架の出来事の中でも、主に弟子たちの裏切りの顛末に的を絞って検討してきた。ここから湧き出てきた問いや疑問は少なくない——ユダやペテロを始めとして、イエスを十字架上に追いやって逃げ去った弟子たちは、「其の信仰なきと、その心の頑固なると」の長いトンネルの中にいつまで留まり続けたのか？ 彼らが捕われた痛切な罪意識と悔恨とは如何なるプロセスを経て、また如何にしてその清算がなされたのか？ そして彼らは如何なる光の下で、また如何にして、新たに「一粒の麥」としての死を自らの身に引き受け、「永遠の生命」への新たな道を歩み始めたのか？ あるいは「永遠の滅び」に沈んでしまったのか？ あるいは如何なる挫折を体験し、再び立ち上がったのか？ イエスの「十字架の死」の深い理解の上に立ち、独自の「十字架の神学」を打ち建てたパウロの場合を除いて、輝かしい「キリスト論」に立つ原始キリスト教会は、師イエスの「十字架の死」を巡り、何故これら「ユダ的人間論」に関わる事実を余り明らかにしないのか？

「不信と懐疑の子」である我々の内からは、様々な問いと疑問が湧き起こる。

## ドストエフスキイの世界へ

新約世界ではストレートに答を読み取り難いこれらの問題を携え、我々はドストエフスキイの世界に向かいたい。自らの文学空間に独自の聖書的磁場とそのドラマを創り出すことで、「聖なるもの」を否定し抹殺し去ろうとする人間の根源的悪魔性を凝視し、そこから人間と世界と歴史について思索を続けたのがドストエフスキイである。彼が『カラマーゾフの兄弟』において徹底的に追求したのが「キリスト論」と、殊に「ユダ的人間論」の問題であると言えよう。彼が主人公たち一人一人に演じさせたのは、我々が第1章で見た「一粒の麥」の死のドラマであり、これは新約諸書が覆いをかけてしまった裏切りの弟子たちが辿った足跡の詳細を、十九世紀近くの隔絶を超えて新たに白日の下に曝け出し、その罪意識の帰趨について誤魔化しなく示してくれるものである。この問題をカラマーゾフ家の次兄イワンに即して考えること、そしてイワンを通して新約世界とドストエフスキイ世界と現代世界とを往還し、人間精神を理解する上で不可欠な視点である「ユダ的人間論」を、「キリスト論」も入れて、より明瞭な視野の下に置くよう試みること、少々大上段に構えた物言いとなってしまったが、これが本章の課題である。

## 聖俗二つの死

新約の世界からカラマーゾフの世界へ。二つの世界を繋ぐべくドストエフスキイが置いたと思われる決定的な鍵、あるいは彼が創り出した福音書的磁場のドラマ、それはカラマーゾフの世界「かちくおいこみちょう家畜追込町」において（舞台となるこの町名自体が、既に新約的磁場そのものである）二晩の内に、より正確には一日、二十四時間の内に立て続けに起こる二つの死、ゾシマ長老の死とカラマーゾフ家の家長フォードルの死である。前者は「聖者」からの余りにも早い、余りにも強烈な腐臭の発生によって、後者は息子による父親惨殺という衝撃的な出来事によって、田舎町ばかりかロシア全土を巻き込んだ大スキャンダルを巻き起こす。これら二つの死はドミートリイ、イワン、スメルジャコフ、そしてアリョーシャというカラマーゾフの四兄弟にとって、決して他人事などではない。直接的であれ間接的であれ、聖者ゾシマと父親フォードルとを死に追いやるのは、他ならぬ彼ら自身なのだ。彼ら一人一人がそれらスキャンダルの源であり、関係者どころか当事者そのものなのだ。イエスの十字架上における惨殺そのままの、あるいはそれと裏返しに重ねられた、聖俗二人の死。これらの死を引き起こし、あるいはそれらに巻き込まれ、兄弟たちはその先如何にして自らの内なるユダ性、存在そのものが宿す悪魔的罪性に目覚めさせられるのか。そして自らを「卑劣漢」とし「罪人」とする痛切な悔恨の末に、如何なる「光」と出会うのか。あるいは依然「闇」の内に留まるのか——正に福音書的磁場で展開するこの作品で作者が試みるのは、兄弟四人が各人各様に追い込まれてゆく、ユダ的罪意識の詳細克明な現象学的追跡と言うべきものである。これら闇と光のドラマを追うことから我々は、新約聖書が扱いきらなかったユダ的裏切りの宗教的・心理的メカニズムについて、少なからぬ考察の手

掛かりを与えられるであろう。

「はじめに」で記したように、本章ではこれら四人の兄弟を代表する存在として次兄イワンを取り上げ、神と「キリストの愛」を巡り、この青年が辿る「肯定と否定」のドラマを検討してゆこう。そこに展開するのは、「ユダ的人間論」と「キリスト論」を対極とする魂の分裂劇であり、ここに新約世界と響き合うカラマーゾフ世界のテーマが明瞭に確認されるであろう。だがこれも「はじめに」で記したように、今回は「父親殺し」後のイワンに対する「悪業への懲罰」の現前、スメルジャコフとの対決の中で展開してゆく罪意識の自覚と、神との出会いのドラマ全体を追うことはせず、主として「父親殺し」に至るまでのイワン、モスクワにおけるイワンの思索の足跡を追うことにしよう。そして「肯定」と「否定」の間に揺れ動く彼の魂の二つの相について、それぞれを個別に検討してゆこう。この上ない矛盾・分裂体、混沌体としてのイワンをそのまま扱っても、我々はただ混乱させられて途方に暮れるだけである。「肯定的イワン像」と「否定的イワン像」との二つを分けて扱うことで初めて、「ロシアの小僧っ子」イワンの全体像を正確に把握することの土台が得られるであろう。

注意すべきことは、モスクワにおけるイワンの思索の足跡を辿り、殊にその「肯定的イワン像」を追うことの中から既に、イワンが神の否定に続き、その後イエスも「キリストの愛」も斥けて、遂には自らを神とするに至る悪魔的「否定の精神」の痕跡が浮かび上がるということである。イワンとは、その思索が肯定に向かえば向かうほど、その精神は逆に否定に傾くという悲劇的悪魔的運命に定められた青年であり、我々人間の内なるユダ性を誰よりも強くその身に刻印する存在だと言っても過言ではないだろう。以下ではまず、このユダ・イワンとは対極にあるイワン、モスクワにおけるロシアの小僧っ子・イワン像を刻んでおこう。

## イワン(一)。「ホザナ！」への希求、ロシアの小僧っ子・イワン

### 「ロシアの小僧っ子」

『カラマーゾフの兄弟』の読者がイワンからまず与えられる印象は、この青年がこの上なく鋭利な知性の持ち主であり、神を激しく弾劾し否定する「叛逆」の思想家であるという印象であろう。だがこの否定面にのみ目を向けることは、この青年の全体像を歪めてしまう危険性が少なくない。「肯定と否定」「信と不信」との分裂に苦しむ思想青年である前に、イワンとは激しい「生への渴望」に燃え、瑞々しい生命力に満ち溢れた若者なのだ。「生への渴望」を激しく内に燃やし、いつの間にか人間の心に宿った「神」という観念、「神の必要性という観念」に誤魔化しなく目を向け、それと熱烈に取り組む求道青年、それがイワンである。この点でイワンとは、弟アリョーシャと同じ地平に立つ青年と言えよう。我々は作者ドストエフスキイがこれら二人の兄弟を、まずは激しい「生への渴望」を内に滾<sup>たぎ</sup>らせる若々しい青年であるとし、それと共に熱烈に「神と不死」を求める求道者、

究極の「ホザナ！」を叫ぼうと熱望する「ロシアの小僧っ子」として提示していることを忘れてはならないであろう（第五篇）。

カラマーゾフ家の兄弟たちに関して、これとほぼ同じ認識を表明するのがラキーチンである。ラキーチンは、アリョーシャもイワンも含め、カラマーゾフ家全員の内には「父親譲りの好色漢」と「母親譲りの宗教的痴愚」、これら二つの相容れぬ血が脈々と流れていると指摘する。イワンの内に脈打つ激しい「生への渴望」と「神と不死」への強い探求心。これら二つが共に彼の内には宿り、その根源的な生命力の源としてあることを、この野心的な俗物青年は、イワンへの強いコンプレックスに苦しめられつつも、むしろそれ故にこそ、冷静的確に見て取っているのである（二七）。

問題はイワンの内には悪魔が、つまり悪魔的「否定の精神」が根深く宿っていることである。そのため「生への渴望」にせよ「神と不死」の探求にせよ、この「否定の精神」によって彼の魂は大きく分裂させられてしまうのだ。殊に「神と不死」の問題において、イワンの思索が「肯定」に向かえば向かうほど、また「ホザナ！」に近づけば近づくほど、それとは真逆の方向に「否定」の精神が発動されてしまうのである。「僕は君を導いて信と不信の間を絶えず行ったり来たりさせるのさ。正にここに僕の目的もあるのだよ」（十一9）。彼の内なる悪魔は、この「否定の精神」の発動が「太古からの定め」であるとさえ語る。闇と光の分裂を存在の奥深くに植え付けられ、しかもその分裂を、弟アリョーシャとは対照的に、「否定」の方向に大きく傾けて生きる青年、この厄介で困難な宿命を担われた存在がイワンなのだ。

イワンの内深くに宿る悪魔の「否定の精神」。このことを念頭に置いた上で、我々はまず「神と不死」の熱烈な探求者、「ホザナ！」を高らかに謳うことを願う「求道青年」としてのイワンに焦点を合わせてゆこう。このイワンについて、我々に様々な情報を提供してくれるのは悪魔だ。作品の終盤近く（十一9）、スメルジャコフチョールトに導かれ、父親殺しの罪の最終的な自覚に至った、そして神に「見つめられる」自分を発見したイワンの前に、彼自身の分身たる悪魔が姿を現わす。この悪魔はイワンのモスクワ時代について、その「神と不死」探求の旅について、半ば嘲笑的に延々と語り聞かせる。悪魔は、己の罪を悟り神と出会ったイワンを、「人神」思想を完成させつつあった頃のイワン、「倨傲の精神」の権化であった力溢れるイワンに再び連れ戻そうと試みるのだ。我々はこの悪魔による回想を丁寧を追うことで、この回想がイワンの内部で進行する人格解体を反映した支離滅裂な形をとりながらも、モスクワ時代のイワンについて数々の重要な情報を提供してくれることに驚かされる。それらの中でも我々がいくら注意してもし過ぎることがないのは、モスクワ時代のイワンとは、否定の方向に刃を研ぎ澄ます「叛逆」の青年思想家である前に、何よりもまず「神と不死」をひたすら探求し、「ホザナ！」を求める「ロシアの小僧っ子」であったという事実である。悪魔が提供する情報は、必ずしも否定的イワン像を積み上げるわけではなく、皮肉なことに、むしろその逆の方向に向かう方が多いのだ。ここにイワンの内なる悪魔が持つ最大の特徴、逆説もあると言えよう。

以下に我々は悪魔が提供する情報を仕分けし、それらを時系列で整理することで、まずは「ホザナ！」を求める肯定的イワン像を浮き彫りにするよう努めてみよう。

### 十七歳の「ホザナ！」

悪魔は既に十七歳のイワンが、「死後の生」に関する一つの壮大な物語、「伝説」<sup>レガンド</sup>を創作し、友人に語り聞かせていたことを明かす。それは「死後の生」を始めとして、何らかの絶対的基準を持つ「法」も「良心」も「信仰」も一切否定した、ある思想家についての物語である。この思想家は最終的には絶対の肯定に至り、「ホザナ！」を叫ぶのだが、以下に、「サワリ」の部分のみを追っておこう。

「死後の生」を否定してきたこの思想家は、その死後初めて、死を超えた来世つまり「不死」が存在することを知るに至る。「これは俺の主義に反する」。抗議をした彼は「裁き」に付され、千兆キロもの距離の踏破を命じる判決が下される。当初は不貞腐れて道に寝転んでいたこの思想家は、最終的には何千億年とも知れぬ時間と、無限とも思われる距離を歩き通し、その末に開かれた天国の門をくぐったのであった。この男は天国に入るや否や、二秒と経たぬうちに歓喜に包まれ、叫び声を上げる。「俺は千兆キロどころか、千兆キロの千兆倍、更はその千兆冪倍でも歩き通して見せる！」—— 否定の権化であった男から、究極絶対の「ホザナ！」が発されたのだ。

細かい分析は必要ないだろう。早熟さと未熟さとが入り混じり、滑稽ささえ漂わせるこの物語が伝えるのは「神と不死」の否定と、他方究極絶対の「ホザナ！」への希求との間で、「一切か無か」<sup>ラディカル</sup>の両極的な思索を大胆に推し進める若者、熱い心を持つ「ロシアの小僧っ子」イワンの姿だ。しかも十七歳の時点で彼の思索は、一切の否定を否定して、「ホザナ！」を謳い上げるといふ絶対肯定の線上に展開していたのである。

養育者ポレーノフに才能を認められ、十三歳で一人モスクワの寄宿学校に送られたイワンが、果たしてどの時点で「神」という観念、「神の必要性という観念」に心を引きつけられ始めたのかは明らかでない。この物語においても「来生」、つまり死を超えた「永遠の生命」「不死」がテーマであり、天の裁きや天国の門について言及はされるものの、具体的に神やイエス・キリストに関する考察の跡は示されない。これは未だ観念的で未熟な宗教的思想劇と呼ぶべきものであろう。だがこの若者はモスクワで「ホザナ！」を目指し、一人この種のラディカルな思索を展開し、それを物語の形に纏めては友人に披露していたのだ。その出発点は十七歳よりも相当早かったと考えるべきであろう。

### 三本の十字架とキリスト

イワンが聖書と取り組んでいたこと、イエス・キリストの内に「ホザナ！」を見出そうとしていたとの情報を与えてくれるのも悪魔である。しかも悪魔によれば、この青年はイエス受難史の終結部であり頂点をなす、イエスの「十字架の死」に焦点を絞り、「キリストの愛」について思いを凝らしていたというのだ。十七歳の「ホザナ！」の延長線上にある

エピソードとして、またその後のイワンの聖書との本格的な取り組みを指し示すエピソードとしても、これは看過することの出来ない情報である。

さて悪魔が言及するのは、ルカ福音書第二十三章が伝えるイエス磔刑の場面だ。共観福音書は一致して、ゴルゴタ丘上にはイエスの十字架を中心として、三本の十字架が立てられていたと報告する（マタイ二十七 38、マルコ十五 27、ルカ二十三 33）。マタイとマルコはその事実を記すのみだが、ルカはこれら三本の十字架上で、イエスと二人の罪人との間で交わされた対話を記す。つまり左隣の十字架につけられた罪人はイエスに対し、お前が本当に「救世主」ならば、自分自身とこの俺たちを救ってみろと毒づく（ルカ二十三 39）。これに対し、この罪人を諫めて神への畏れを迫り、またイエスの義しさを認めて自らの罪を悔いた右隣の罪人は、イエスに憐れみを乞うて受け容れられ、「天国」を保証されたと記されるのである（同 41-43）。この光景を目の当たりにした悪魔は、この後イエスが、自分に憐れみを乞うた右隣の罪人の魂を抱き、「ホザナ！」を謳う大天使・小天使たちの歓喜の声と共に天に昇ってゆく光景を目撃し、自らも危うく「ホザナ！」を叫びそうになったと回想する。当然この悪魔とは、聖書と向き合うイワン自身に他ならない。

注意すべきことだが、実はルカ福音書には罪人の魂を抱いたイエス昇天の光景も、また天使たちの「ホザナ！」絶叫の場面も存在せず、また他の福音書のどのイエス磔殺の場面にも記されてはいない。ルカはイエスが憐れみを乞うた罪人に対し、「誠に汝に告ぐ、正に今日、我と偕にパラダイスに在るべし」（二十三 43）と語ったと記すのみなのだ。恐らくイワンは、ルカが報告するゴルゴタ丘上の三本の十字架の場面を基に、「キリストの愛」に思いを凝らし、彼自身の救済者イエス・キリスト像を創り上げたのであろう。千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説の創作から、更に進んで福音書との取り組みへ。そして十字架上のイエスの姿に究極絶対の「ホザナ！」を見出し、更には福音書の改変まで試みるイワン。モスクワにおける若き熱烈な求道者イワンの姿が浮かび上がってくる。

だがこの時イワンは「ホザナ！」を叫ばずに終わる。間一髪のところ「常識」という名の、悪魔の「否定の精神」が発動されてしまうのだ。この悪魔の「否定の精神」については後の検討に回し、今はこのまま、イワンの「肯定」の方向での思索を追っておこう。我々が焦点を当てつつあるイワンとは、再度の確認となるが、福音書に記された十字架上のイエスを凝視し、そこから人間に向けられた超越的な愛、「キリストの愛」について思索するイワン、つまりキリスト教の精髓に正面から向き合おうとする熱い求道青年イワンである。

## イワンと福音書

ところで「ホザナ！」を求めるイワンの足跡を辿ってゆく時、我々是一个の問いの前に立たされる。イワンは何時から福音書と向き合うことになったのか。優秀な頭脳のゆえに既に十三歳、高等中学校入学時からモスクワに送られ、大学理系への進学を果たしたこの青年が、文学・哲学・芸術を含めた幅広い教養の中に、新約旧約の聖書知識を組み込んで

いたとしても何ら不思議はないであろう。だが十七歳にして既に、あの千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説まで創作していたイワン、「神と不死」の熱烈な探求者であるこの「ロシアの小僧っ子」イワンが、その後聖書との取り組みの中でも福音書、殊に十字架のイエスと「キリストの愛」の凝視に向かったこと——この十字架に向けて青年を突き動かす何か決定的な要因があったとするならば、それは何処に見出せるのであろうか。これはこの作品の中で、我々読者が行き当たる大きな謎の一つとも言うべきものである。

モスクワ時代のイワンの思索に関する情報源は、主に二つ存在する。故郷家畜追込町の料亭「みやこ」での弟アリョーシャとの対決と（五3-5）、悪魔が明かすモスクワにおける思索の足跡である（十一9）。これらの中で、我々の問いに対する手掛かりは前者の「みやこ」にあり、ここでイワンが弟に語り聞かせる「叛逆」の思想の中に見出せるであろう。イワンの「叛逆」の思想とは、この後で追う否定的イワン像、つまり悪魔の「否定の精神」に憑かれたイワンの思索の中核をなすものであるが、肯定的イワン像を浮き彫りにするためにも、ここで簡単に見ておくことにしよう。

人間の心の内にいつの間にか宿った「神」という観念、あるいは「神の必要性という観念」。この不思議の前に佇み、この不思議を正面から解こうとした真摯な青年がイワンであることは先にも見た。「神」という観念、「名號」の持つ不思議を巡り、作者が「ロシアの小僧っ子」イワンに付与したこの真摯かつ本質的な思索の姿勢は、いくら注意しても注意し過ぎることはないであろう。だがこの「神」を求め、また死を超えた「永遠の生命」を求め、そこに絶対至上の「ホザナ！」を得ようとするイワンがぶつかったのは、ユークリッド的知性の限界性という壁であった。時間と空間の限定性の内に閉じ込められた人間の認識能力には、超越的存在の認識は不可能である。彼が行き着いたのは、このようなカント的認識論の角度からする神否定であった。次いで彼が至ったのは、地上に満ちる不条理、「罪なくして涙する幼な子たち」の存在の凝視からなされる神否定、より正確には倫理的な角度からの神の世界の拒否と弾劾である。その末にイワンの目の前に広がった世界とは、ただ罪なき幼な子たちの涙が流され続けるだけの不条理の世界であり、その世界に確実にあるものとは言えば、彼の「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」だけでしかなかったのだ——これがアリョーシャにイワンの語る「叛逆」の思想の概略である。「叛逆」という言葉の内に見出されるのは、「神と不死」の熱烈な探究者イワンの「苦しみ」と「憤怒」、その熱い血と涙に他ならない。ここに見出されるのもまた、肯定的イワン像なのである。

さて神が追放された荒涼殺伐たる地上の曠野。そこでイワンの視野に捉えられたのが福音書であり、殊にゴルゴタ丘上の十字架で磔殺されたイエスと、「キリストの愛」であった——これがイワンの福音書との出会いの謎に至る、最も自然な推測の道筋であろう。イエスが、この不毛そのものの荒涼殺伐たる地上世界で神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕えられ、神に「父よ！」とさえ呼びかけ、遂には十字架上で磔殺されるに至るまでその愛を貫いたとするならば、イワンにとり、この地上の荒涼殺伐たる曠野は、最早曠野で

はなくなるであろう。明晰な頭脳を持つイワンにとり、このイエスが流した血、「キリストの愛」は既にそれ一点だけで、彼の神否定の思索と論証、「叛逆」の思想一切を覆す「アルキメデスの槌子」となったことであろう。「叛逆」の思想青年イワンの視野に、福音書のイエスの存在は、そしてその十字架は、恐らくは決定的な意味と重みを持って立ち現れたに違いない。

モスクワにおけるイワンの思索の流れを、ここで一度整理しておこう。イワンの才能を認めた養育者ポレーノフによって、彼が高等中学校で学ぶべくモスクワに送られたのは十三歳の時であった。千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説の創作が十七歳、そして聖書熟読の上に立つ叙事詩「大審問官」の創作が二十三歳の時とされる。恐らくイワンが正面から聖書と向き合い始めたのは、二十歳前後のことと考えるのが自然であろう。あの「伝説」創作の後、大学生となったイワンは「罪なくして涙する幼な子」たちの現実、人間と世界と歴史の不条理と向き合う中から、神を激しく弾劾し否定する「叛逆」の思想家となっていたのであろう。だがその一方で、本来「ホザナ！」を切望する「ロシアの小僧っ子」イワンは、福音書のイエス・キリストと出会い、その十字架と「キリストの愛」の真実性と現実性に強く心を動かされ、聖書的磁場での思索を進める求道青年としても成長していったのだ。つまり地上の不条理、人間の持つ罪性についての認識が深まれば深まるほど、イワンのイエスと「キリストの愛」に関する認識もまた深化していったと考えられる。彼が見つめる十字架についても、ルカ福音書が伝える十字架上のイエスに憐みを乞うた罪人から、イエスに毒づいた罪人へ。その思索の焦点は、イエスの十字架の右隣りから左隣りへと移し変えられ、人間の罪性とそれに注がれる「キリストの愛」とに関する思索は、両者が表裏一体となって加速度的に深まってゆくのは自然な流れであったろう。

そしてイエスを罵った左隣りの罪人を、人間と世界とその全歴史が示す現実を重ね、「人間の中の悪魔性」と「キリストの愛」との対決として正面から考察するに至ったのが、「大審問官」の叙事詩であると考えられる。

### 「キリストの讚美」としての「大審問官」

家畜追込町の料亭「みやこ」。ここでイワンとアリョーシャ兄弟が繰り広げる戦いとは、ゴルゴタ丘上の十字架のイエスに収斂する戦い、地上における「キリストの愛」の究極の真実性と現実性を巡る「肯定と否定」の戦いである。いよいよ時の到来したことを見定めたイワンが、満を持してぶつけるのが「大審問官」の叙事詩、彼が全力を傾けたキリスト論である（五五）。これは人間と世界とその全歴史を向こうに置いて、つまりは「人間の中の悪魔性」の認識の上に、イワンが福音書のイエスと、「キリストの愛」とに真正面から取り組んだ、モスクワにおける思索の総決算と言うべきものである。

「肯定と否定」が複雑に入り混じり、「聖と俗」の両世界が劇的に対決する「大審問官」の叙事詩。その細部に徒に迷い込むことを避けるために、またイエス・キリストと神とに

対するイワンの姿勢を明確に捉えるためにも、我々はまず先に、「大審問官」に対してアリョーシャが発する三つの言葉、全く相反する二つの方向での評言を確認しておこう。

「兄さんの劇詩はキリストに対する讃美であって、弾劾ではない」（五五）

「兄さんの大審問官は神を信じていない。それが秘密の全てです！」（同上）

「兄さんは神を信じていないのです」（同上）

アリョーシャは「大審問官」の内にある、そして「大審問官」の作者兄イワンの内にある「肯定と否定」の分裂と矛盾を的確に見抜いたのだ。キリストを理解し讃美するイワンが、実はキリストが人間の心に向かわせようとした神を信じてはいないこと。これは既に我々が確認してきたイワン、つまり「神と不死」を求める求道青年であると共に、その神を否定するに至った「叛逆」の思想家イワンが抱える本質的な矛盾・分裂そのものである。このことを念頭に置き、ここではまず絶対の肯定に傾くイワン、「キリストの讃美」としての「大審問官」の叙事詩を見ておこう。

### 再臨のキリストの登場

注目すべきは「大審問官」の冒頭だ。中世スペインのセヴィリアの街に再臨のキリストが登場するや、民衆は直ちにそれが「キリスト」であることに気づく。ここでイワンが重ねて語るのは、地上への再度の登場を決意するに至ったキリストの、民衆に対する「計り知れない同情心」と「限りない慈愛の心」である。キリストの胸には「愛の太陽」が燃え、その眼には「(神の)光明と叡智と力」が宿されている。一方「それに応える愛で心を打ち震わせる」民衆。彼らの内にも熱い「信仰の炎」が燃えている。「ホザナ！」の熱烈な探究者、「ロシアの小僧っ子」にして初めて可能な、見事なキリストと民衆との出会い、両者の間に燃える愛と信の一瞬にしての響き合いである。イワン自身も語る。「この場面がこの叙事詩の最も優れた場面になるだろう」。ここに「叛逆」の思想家の影は微塵もない。兄の口から語り出されたこの場面を耳にしたアリョーシャの驚きと感動も想像に難くない。

続いて描かれるのは、この熱狂の中でイエスが行う二つの奇跡だ。まずは「幼くして盲目となった老人」の懇願を容れた癒しの奇跡。そして「タリタ・クム（娘よ、起きよ）」、死せる少女復活の奇跡である(マルコ五21-24/35-43、マタイ九18-19/23-26、ルカ八40-42/49-56)。高揚した口調で語られるこれら奇跡の詳細は、ここでは省略しよう。

「大審問官」の叙事詩冒頭が我々に伝えるのは、イエスと「キリストの愛」について、イワンが示す理解の驚くべき深さである。続く「荒野の試み」を巡る大審問官の弁論、叙事詩の中核部が提示するキリスト像もまた、イワンが如何に深く福音書を読み込み、イエス・キリストの本質について思索をし、また感動もしていたかを証するものだ。

### 「荒野の試み」

セヴィリアの街への登場。一瞬にしてなされる民衆の認知。熱狂的な歓迎と、その中で行われる奇跡。だがキリストは直ちに大審問官によって逮捕される。牢獄を訪れた大審問官が、沈黙のキリストを相手に繰り広げる大弁論。これは福音書の「荒野の試み」(マタイ四 1-11/マルコ 12-13、ルカ四 1-13) を土台としたキリスト論と人間論とからなり、イワンの「大審問官」の叙事詩における中核の一つである。

イエスと悪魔との間で交わされる「荒野の問答」三つの中で、大審問官が主に取り上げるのは第一の問答だ。「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ」(マタイ四 3)。こう悪魔から切り込まれ、直ちにイエスは返す。「《人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出ずる凡ての言葉に由る》と録されたり」(マタイ四 4)。この問答を「地上のパン」と「天上のパン」の問題として、また人間の神に向かう自由の問題として論じる大審問官の弁論は、福音書のイエスを凝視してきたイワンの思索の総決算と言うべきものであろう。

大審問官によればイエスとは、人間の生の究極の糧は神から与えられる「天上のパン」であるとし、また人間は神から「天上のパン」に向かうべき自由を付与されているとするイエスである。つまり神と人間への絶対の信と愛とを示すイエスに他ならない。更に大審問官によれば、通りがかりの者たちが、「いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん」、このような冒瀆と嘲笑の声を投げつけても、イエスは決して十字架から下りることはしなかった(マタイ二十七 42 / [39-44、マルコ十五 29-32、ルカ二十三 35-38])。イエスが人間に望んだのは神に向かう自由な信に外ならず、如何なる形であれ、奇跡への信などではなかったからだ。(この「自由論」は後に改めて取り上げよう)。ここにいるのは人間に対するイエスの絶対の信と愛とを見据えるイワン、「キリストの愛」に深く心を動かされたイワンである。「兄さんの劇詩はキリストに対する讚美であって、弾劾ではない」。アリョーシャの叫びは、このイワンへの感動から発された叫び以外の何物でもない。

続く大審問官登場の必然に関する長大な論証。この大審問官の背後にいるのは、自分に与えられた神に向かう自由に耐えられず、その自由を大審問官に譲り渡してしまった人間、「聖なるもの」を裏切る「人間の中の悪魔性」を凝視するイワンだ。いよいよここに「叛逆」の思想家イワン、神の否定に続いて「キリストの愛」をも否定し、斥けるイワンが登場するのである。この悪魔の「否定の精神」に憑かれたイワンの検討が、次に否定的イワン像を辿る際のメイン・テーマである(イワン(二))。

否定的イワン像の検討に進む前にもう一つ、「聖母の地獄(責苦)巡り」を見ておこう。これは彼が「大審問官」の劇詩を語り出すにあたって、その導入部のように語る物語、東方修道院に伝わるギリシャの古詩から採られた物語である。ここにあるのは「キリストの愛」について思索を深めるイワンが、更に聖母や神の愛と慈悲にも目を向ける姿であり、我々は絶対肯定の「ロシアの小僧っ子」イワンの姿を確認出来るであろう。

### 「聖母の地獄(責苦)巡り」

この物語の主人公はイエスの母、聖母マリアだ。地獄を訪れた聖母は、そこの「火の湖」に埋められ、「神からも忘れ去られ、苦しみにのたうつ罪人たち」を目にして、涙ながらに神に向かい、この罪人たちへの赦しを懇願する。だが神はマリアに対して、手と足を釘付けにされた十字架のイエス・キリストを指し、この子を苦しめた彼らをどうして赦せようかと問い返す。聖母はなお天使たちと共に、必死に神に哀願し、罪人たちに対する慈悲を乞い続けるのであった。神は遂に聖母の愛に打たれ、受難週の金曜日から五旬節までの間だけ地獄の責苦は中止される(五五)。

イエスを十字架上の磔殺に追いやったため、地獄の底に落とされて劫罰にのたうつ罪人たち。その罪人たちに注がれる聖母マリアの愛。そして聖母マリアの愛を受けて示される神の慈悲と愛。恐らくキリスト教について考える上で必要不可欠な要素のほぼ全てが、この上なく簡潔平明に織り込まれた見事な物語である。これはイワン自身の創作によるものではない。また彼がこのギリシャの古詩あるいは物語をいつどのようにして知ったのかも明らかではない。だがこの極めて短い物語は、福音書を巡る青年イワンの思索が如何なるところに焦点を絞り込んでいったかを示す、この上なく重要な指標である。

聖母マリアの愛に目を注ぐイワン。このイワンは、先のルカ福音書の三本の十字架を見詰めるイワンから遙か先に歩を進め、新たな十字架理解に至りつつあるイワンである。つまり先にこの若者が凝視したのは、十字架上で悔い改めた罪人であり、その魂を抱いて昇天してゆくイエスであった。だが今や彼が聖母マリアを介して見詰めるのは、この悔い改めたイエスの右隣りの罪人ばかりか、イエスを罵った左隣りの罪人をも超えて、イエス磔殺に直接関わったユダヤの宗教的権力者たちやローマの支配者たちのみではない。他ならぬイエスを裏切って十字架の上に追いやり、そして逃げ去ってしまったユダやペテロを始めとする弟子たち、更には罪に沈む人間全てと言うべきであろう。

また翻ってイワンの思索が向かうのは、愛する息子イエスを磔殺した極悪人たち、罪ある人間全てに注がれる聖母の愛と、この聖母の愛に動かされる神の慈悲と愛に対してである。人間の内なる悪魔的罪性を凝視するイワンと、その罪性に注がれる超越者の愛と憐みへの眼。十字架のイエスに焦点を絞ったイワンの思索は、「否定と肯定」それぞれの方向で、決定的とも言うべき深まりを見せたのだ。そしてその極にある認識が次に見る、「キリストの愛」を裏切った「ユダ」大審問官に対する、イエス・キリストの接吻として表現されるであろう。

### 「肯定」から「否定」へ

以上見てきたように、作者ドストエフスキイがイワンに積み重ねさせた聖書知識と思索の奥深さは、この青年が如何に熱烈かつ真摯に「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」であったかを示して余りあると言えよう。悪魔が明かすモスクワ時代のイワンの足跡とは、その殆ど全てが「ホザナ!」を熱烈に求め、福音書のイエスと「キリストの愛」を追う求

道青年イワンの足跡であり、「キリストの讚美」に向かう「肯定的イワン」の足跡であると言っても過言ではないのだ。

先にも確認したように、悲劇はアリョーシャとは対照的に、この青年の心の奥深くには悪魔の「否定の精神」が余りにも深く根を張り、「神と不死」に関する彼の思索が肯定に向かえば向かうほど、また「ホザナ！」に近づけば近づくほど、それとは真逆の方向に「否定の精神」が発動されてしまうことだ。次章ではこの悪魔の「否定の精神」に的を絞り、「ロシアの小僧っ子」イワンが悪魔と共に示す、今までとは逆の「否定的イワン」の足跡を追ってゆこう。

## イワン(二)。「キリストの愛」の否定、ユダ・イワン

### 悪魔の「否定の精神」

今度はイワンの「否定の精神」に目を向けよう。前章では専ら「ホザナ！」を求める「ロシアの小僧っ子」イワンの「肯定」面に目を向け、主に悪魔の言葉を基に、「叛逆」の思想青年イワンのイエスとの出会い、イエスの十字架と「キリストの愛」への感動、そしてその認識の深化に的を絞ってきた。その極にあったのは「聖母の責苦（地獄）巡り」と「大審問官」の叙事詩であり、そこに認められたのはイワンの圧倒的とも言うべき聖書理解の深さであった。以下ではこの肯定的イワン像に対し、否定に傾いたイワン像の検討である。ここに見出されるのは、アリョーシャが「兄さんは神を信じていないのです」と叫ぶ悪魔イワンの姿に他ならない。

なお具体的な叙述については、先の肯定的イワン像で扱ったテーマを再度取り上げ、否定的イワン像の確認をするため、繰り返しの部分が多くなるが、我々はそのことを避けず、肯定と否定に分裂したイワンの全体像を浮かび上がらせることを目指したい。

### 神の否定と弾劾、「叛逆」

イワンが展開する神の否定と、それに続く神の世界の弾劾と否定、つまり「叛逆」の思想は、彼が「神」という観念に強く魅せられ、真摯この上ない「神と不死」の探究者であるがゆえにこそ、一層強く読む者の魂を震撼させるものである。前章で見たように、彼の神否定がなされるのは、超越的存在の認識は人間のユークリッド的知性の守備範囲内にはないとするカント的認識論の線に沿ってである。ここに見られるのは、神の熱烈な探究者イワンが、認識論的潔癖さから、神を天上に追いやるといふ悲劇的悪魔的逆説と言えよう。次いで彼は宣言する。この地上に満ちる不条理、「罪なくして涙する幼な子」たちという現実がある限り、神の存在は認められない——ここにあるのはイワンの倫理的潔癖さであり、これもまた青年求道者の悲劇的悪魔的な叫びと言ふべきであろう。認識論的神否定から、倫理的弾劾と神の世界の否定へ。この否定精神の行き着く先、イワンの目の前に広がる世界とは、およそ意味の意味たる一切を奪われた世界、「一切が単純直截に因果関

係の連鎖で生じ、一切が流れてゆき、釣り合いを保っている」だけの絶対的無価値の世界でしかない。そこはただ彼の「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの殺伐たる曠野なのだ。『カラマーゾフの兄弟』の頂点の一つをなす、圧倒的な悲劇的悪魔的論証である。言うまでもないことだが、我々はここにイワンと重ねられたドストエフスキ自身之魂の苦悩、「時代の子」「不信と懐疑の子」が捕らわれた苦悩も読み取るべきであろう。我々はここに単に「否定のための否定」という不毛な精神を見てはならない。この否定の底にあるのは、この地上に「神と不死」を求める熱い魂とその苦悩である。

イワンが行き着いた神なき広漠たる曠野、ただ「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの殺伐たる不毛の荒地。先に我々は、そこでこの青年が出会ったのが福音書のイエスと「キリストの愛」であると考えた。底知れぬ闇の底で初めて、彼は光との出会いを与えられたのだ。だが以下で我々は、再度彼の聖書との取り組みを追い、今度はその感動が否定されるプロセス、イワンにおける悪魔の「否定の精神」が発動される場を確認しなければならない。

#### 十字架への感動、そして「ホザナ！」の拒否

イワンの福音書との取り組みは、この上なく鋭利なものであった。何よりもこのことを証するのは、彼が十字架のイエスに焦点を絞ったという事実そのものである。福音書に触れても、どこに焦点を絞るべきか、我々にはなかなか見当がつかない。焦点はイエスの「神の国」の宣教にあるのか？ 病の癒しや悪鬼の追放を始めとする数多くの奇跡にあるのか？ 様々な場で語られる譬え話にあるのか？ 弟子たちとの伝道生活にあるのか？ あるいは論敵との戦いに、エルサレムでの受難物語に、十字架上の死と復活にあるのか？ 等々等々——目の前に展開する事柄は数多く、果たしてイエスの出来事を中心が何処にあるのか、なかなか理解し難いのだ。

ここで前回扱ったパウロのことを思い出そう（「研究会便り（6）」、<sup>5</sup>パウロの十字架）。原始キリスト教生成の最初期において、生前のイエスの言説や振舞いには殆んど目を向けず、十字架こそがイエスの生の極まるものだとして、ひたすら十字架に目を凝らし思索を続けたのはパウロであった。彼はイエスの「十字架の死」を介してなされた神の救済の業、人間に向けられた愛と信に焦点を絞り、そこから「十字架の神学」（ルター）とも呼ばれるキリスト教思想の土台を築いたのであった。イワンもまた、何よりもまず十字架を凝視し、「キリストの愛」について思索をする青年だったことは、思想家としての彼の知性の鋭さばかりでなく、真摯かつ熱烈な求道者としての魂の熱さをも証するものとして、最大限に注目すべきであろう。

悪魔の回想によれば、十字架を凝視するイワンは、イエスが右隣の罪人をかき抱き昇天してゆく光景に「ホザナ！」を叫びかかったのであった。地上を支配する不条理を前に、「隠れた神」しか見出せなかったイワンにとり、十字架のイエスが表わすものとは、己の死に至るまで罪人に向けられた愛と憐みと赦し、つまりは「キリストの愛」に他ならなか

ったのだ。彼はこの感動をアリョーシャに向かい、こう言い表す。「人間に対するキリストの愛は、この地上ではあり得ない一種の奇跡だ」(五4)。

だが既に見たように、十字架上に示された「キリストの愛」に心を揺り動かされたものの、この時イワンは結局「ホザナ！」を叫ぶことはなかった。間一髪のところ「常識」という名の、悪魔の「否定の精神」が発動されてしまったのだ。

「だが常識が、そう僕の最も不幸な特性がギリギリのところを僕を引き留めて、僕は折角の瞬間を逃してしまった！ と言うのも、自分が《ホザナ》[ママ]を叫んだりしたら一体どういうことになるだろうなどと、その瞬間に考えてしまったからだ。直ちにこの世界では全てが消え去り、何の出来事も起こらなくなってしまうだろう、と」(十一9)

イワンを「ホザナ！」の直前にまで導きながら、結局は彼にそれを斥けさせてしまった「常識」。悪魔はこの「常識」という名の「否定の精神」が、自分の「最も不幸な特性」と語る。イワンの内なる「常識」。これが日常生活を円滑に進めさせる習慣化された知識などでないことは明らかだ。作者ドストエフスキイはこの青年の内に、目に見えない決定的な力の働きである「否定の精神」を植え込み、それを悪魔に「常識」という名で呼ばせ、イワンを嘲笑していると考えられる。更に悪魔は「常識」による「ホザナ！」の否定こそ、「世界の存続にとり必要不可欠なもの」だとさえ語るのだ。この「常識」という名の「否定の精神」の発動は、「ホザナ！」を否定するに留まらない。それは更に「大審問官」の叙事詩における「キリストの愛」の否定へと進み、最終的には自らを「人神」とするまでに至るであろう。この悪魔的「否定の精神」の発動は、イワンの内でなおそのまま無限循環を続けてゆくのか、あるいは「否定」を否定して、究極絶対の「肯定」へと逆転するのか、我々は最大限の注意を以って見守らねばならない。

### 「大審問官」における否定、「自由論」

「大審問官」の冒頭に戻ろう。再臨のキリストの登場と、続く二つの奇跡。ここに表現されたのは、イエスと「キリストの愛」についてイワンが持つ鋭く深い理解と感動であった。続いてイエスを前にした、「荒野の試み」を巡る大審問官の弁論。「大審問官」物語の中核部とも言うべきこの部分において、「天上のパン」と「地上のパン」を巡って描き出されるイエスとは、人間に対して、絶対の自由の内に神に向かうことを望み要求するイエスである。神と人間の間にある自由を見つめるイワン。ここにあるのもまた、先に見たように、福音書とイエス・キリストに関するイワンの理解の驚くべき鋭利さと深さだ。

だが注意しなければならない。正にこの自由論を土台とするイエス・キリスト像の提示こそ、イワンがイエス・キリストを斥け、それに代って人間を支配し奴隷とする大審問官を登場させる<sup>てこ</sup>梃子となるのだ。では大審問官の自由論のどこを「梃子」として、イワンは

大審問官にイエス・キリストを斥けさせるのか。イワンの内に植え込まれた悪魔の「否定の精神」、その発動のメカニズムを十全に理解するためにも、ここで大審問官の自由論を改めて確認しておこう。

大審問官によれば、イエスの宣教の根幹は、人間は自らに与えられた自由を基に神に向かわねばならないという一点にあった。だが人間はその生来の弱さと卑劣さと愚かさゆえに、イエスが説く神に向かう自由を受け止め切れず、その自由をむしろ重荷とするだけであった。このイエスと人間との間にあって、イエスの人間に対する絶対の信と愛を知り、また人間本性の弱さと卑劣さと愚かさをも知悉し、かつその人間を愛さずにはいられない存在が大審問官であった。そしてこれら両者の板挟みの苦悩が大審問官を追いやった結論とは、人間からその自由を取り除いてやること、つまり神の名の下に人間に「地上のパン」を与えてやることであった。たとえそれがイエスの人間への信と愛を中間で搾取し歪め、人間を神から遠ざける結果となろうとも、また「天上のパン」に代る偽りの満足と平安を付与することで、人間を大審問官の支配と管理の下に「ひれ伏させる」という隷属への道に繋がろうとも、そのことにより人間は自由の重荷から解放され、ともかくは平安の内に憩うことが可能となるであろう……

#### 人間への絶望と軽蔑、そして「虚偽と欺瞞」

大審問官が提示するイエスの自由論。この背後にいるのは福音書のイエスを凝視するイワンであることを忘れてはならない。このイワンとは、イエスの本質が人間を絶対の自由の内に神に向かわせること、つまり人間への絶対の信と愛とであることを見抜いたイワン、一言で言えば「キリストの愛」に心から感動するイワンである。この肯定的イワンについては、我々は既に十分に見てきた。だがここで最大限に注意すべきことは、同時にイワンとは、人間にこの上なく厳しく容赦のない目を向けるイワンであり、弱さと卑劣さと愚かさしか持ち得ない人間に対する深い絶望と軽蔑に領されたイワンでもあるという事実である。彼が提示する大審問官の人間に対する愛は、その裏返しとして、人間に対するこの上ない絶望と軽蔑と呼応するものなのだ。

この否定的イワンとは、既にアリョーシャと対決する「叛逆」の思想青年の内に認められるものである。つまりこの地上に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちを凝視し、神を否定し弾劾するイワンの内に、我々は先には熱い魂のイワンを認めたのであるが、その裏返しとしてあるのは、この地上に不条理しか生み出さない「人間の中の悪魔性」を凝視し、それに絶望し軽蔑するイワンでもあるのだ。イワンとは、イエスを深く理解し感動するイワンであり、同時に、人間を深く理解し軽蔑するイワンなのだ。

この両極的なイエス観と人間観との間に分裂するイワンが、大審問官に選ばせたのは、イワン自身がアリョーシャに語る言葉で言えば、「虚偽と欺瞞」の道であった。人間が示し続ける負の現実を前にして、イワンの大審問官が採った道とは、その負の現実をそのまま受け容れ、利用するという道であった。つまり大審問官は、人間に絶対の自由の内に神

に向かうことを説き、人間への絶対の信と愛を貫くイエスを斥け、そのイエスの名の下に人間から自由を取り上げ、自らの奴隷としてしまったのである。これが「虚偽と欺瞞」の道であることは「大審問官」物語の作者であるイワン自身が深く自覚していたのである。

### 世界のユダ的現実

大審問官に「虚偽と欺瞞」の道を取らせたイワンとは、地上の人間を二種類に分けるイワンである。一方にいるのは自らが「善悪の認識という呪い」を背負い、イエスを裏切ってその「偉業を修正し」、偽りの愛の名の下に人間を奴隷とするに至った大審問官である。他方にいるのは、イエスから示された神と「天上のパン」に向かうべき自由を、「地上のパン」欲しさに嬉々として大審問官に譲り渡してしまった人間、つまり神とイエスを裏切った「永遠に背徳的で永遠に下劣な」人間である。つまりイワンにとりこの地上世界とは、「選ばれし少数の大審問官」と、その支配下にある大多数の「意気地なしで、哀れな子供のような」人間たちが占拠する世界なのだ。そしてこれら両者はとどのつまり、人間に対する神とイエスの信と愛とを裏切り、十字架上に追いやるユダたちという一点に帰されると言えよう。イワンの「虚偽と欺瞞」が皮肉にも我々に暴き出して見せるのは、全人間がその全歴史を通じて示してきたイエス・キリスト疎外、「キリストの愛」の否定という「人間の中の悪魔性」に他ならない。

このイワンの「虚偽と欺瞞」について更に考えておこう。既に明らかとなったように、イワンの認識の土台にあるものとは、人間の弱さと卑劣さと愚かさ、一言で言えば「人間の中の悪魔性」に目を釘付けとされることから生まれた、人間に対する深い絶望と軽蔑である。この絶望と軽蔑の底でイワンは二つに分裂するのだ。一方のイワンとは、十字架上の死に至るまで「人間の中の悪魔性」と正面から戦ったイエスに、つまりは「キリストの愛」に感動するイワンである。もう一人のイワンとは、そのイエスと「キリストの愛」を斥ける「人間の中の悪魔性」に与するイワン、そして結局はその人間を奴隷とし、自らを地上の支配者としようとする大審問官の創作者、言い換えれば彼の内なる「倨傲の精神」に身を委ねたイワンである。イワンはこの絶対矛盾・分裂の中で、最終的に悪魔の「否定の精神」に自らを任せ、大審問官の側に身を置いたのだ。「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの荒涼たる地上世界。そこでイエスと出会ったイワンが最終的に自らを委ねたのは、そのイエスをも、イエスが指し示す神をも抹消する「人間の中の悪魔性」であり、「倨傲の精神」だったことをここに確認しておこう。

このイワンの分裂と矛盾、そして「虚偽と欺瞞」を見抜くのがアリョーシャである。

### アリョーシャの二つの反応

ここでもう一度、「大審問官」に対するアリョーシャの反応に戻ろう。彼の反応は全く相反する二つの方向でなされたのであった。まずは「兄さんの劇詩はキリストに対する讚美であって、弾劾ではない」。イワンが凝視する人間の弱さと卑劣さと愚かさ、つまりは

「人間の中の悪魔性」は措いて、彼はまず兄イワンのイエス・キリストへの深い洞察を見て取り、その見事なキリスト論に心を揺り動かされたのだ。

しかしこれがアリョーシャの最終的な判断ではなかった。「兄さんの大審問官は神を信じていない。それが秘密の全てです!」。イワンのキリスト理解を絶賛したアリョーシャは同時に、イワンが提示した大審問官の自由論の背後に、神なきイワンと大審問官とを、つまりは「虚偽と欺瞞」を既に見て取っていたのだ。イワンが讃美するイエス・キリストとは、何よりもまず人間が絶対の自由の内に神に向かうことを望み、ゴルゴタ丘上の十字架にまで追いやられたイエスであった。このイエスの十字架を凝視し、「キリストの愛」を「この地上ではあり得ない一種の奇跡だ」とまで語りながら、イワンは大審問官に、イエスが至上のものとして説いた神に至る自由を奪い取らせ、人間を神から引き離させ、奴隷として支配させてしまったのだ。この大審問官を描くイワンの内に神はいない。これがアリョーシャの結論である。

この大審問官とは、無神論の上に神の代理人の役目を果たすローマ・カトリックと同根の貉ではないか——この後アリョーシャとイワンとの間で論じられる「大審問官」としてのローマ・カトリック教会論、殊にアリョーシャのイエズス会批判の背後には、ドストエフスキ自身が確信する「神なき」カトリック批判から、更には「神なき」社会主義批判までもが顔を覗かせ、彼の人間観と世界観と歴史観について考察すべき、興味深く重大な問題が存在するのだが、今回はこの問題について論じる<sup>スペース</sup>余裕がない。

「悲痛な調子」を以ってイワンが返す。大審問官は自らの「虚偽と欺瞞」を知りつつ、「悪魔の指示に従って」愚かで卑劣で弱い存在でしかない人間を導いている。彼の内にも人間への愛が脈打ち、その事業は「生涯その理想をかくも熱烈に信じ続けて来たその人[イエス・キリスト]の名において行われる」。つまりそれは悲劇性を担った不幸な事業なのだ・・・

イワンの言葉は、最早アリョーシャには貧困な弁解にしか響かない。「この上ない悲しみ」を以って、アリョーシャから最後の判断・判決が下される。

「兄さんは神を信じていないのです」(五五)

「虚偽と欺瞞」。アリョーシャは人間とイエス・キリストと神の問題に関して、兄の認識の不徹底と誤魔化し、矛盾と分裂をはっきりと見て取ったのだ。影の薄い弱々しいアリョーシャ像を思い描くことは的外れである。『カラマーゾフの兄弟』において、ゾシマ長老と共に誰よりも鋭く深い洞察力を持ち、誰よりも確固たる「実行的な愛」の人がアリョーシャである。

### ユダへの、キリストの接吻

神を見出していないイワン、神に見出されていないイワン（十一8）。このイワンに向かい、なおアリョーシャはこれが本当に叙事詩の結末かと食い下がる。兄の心の最深奥にあるものが究極の「否定」なのか、あるいは「肯定」なのか、薫にすがる思いでアリョーシャはもう一度問い質したかったのであろう。

案の定イワンは、まだ「大審問官」の結末を語ってはいなかった。アリョーシャの問いに応じてイワンが最後に語るのは、大審問官に対して沈黙の内に接吻を与えて去るイエス・キリストである。自分を十字架上の磔殺に追いやった裏切り者ユダの接吻（マルコ十四45、マタイ二十六49、ルカ二十二47、[ヨハネ十八3]）。その接吻に対して、逆に返されるイエス・キリストからユダへの接吻。このキリストの接吻とはユダたる大審問官への接吻であり、また大審問官にひれ伏すもう一人のユダたる人間の、弱さと卑劣さと愚かさ一切への接吻であり、つまりは「人間の中の悪魔性」への死を超えて燃え続けるキリストの信と愛と赦しの接吻に他ならない。アリョーシャの問いに対してイワンが返したのは、福音書との取り組みから彼が掴み出した究極絶対の「肯定」、「キリストの愛」の提示だったのである。この接吻こそ、ドストエフスキイが描き出した様々なイエス像の極北に位置するものと言うべきであろう（「ドストエフスキイのイエス像」については、次に所載の拙論を参照。雑誌「アンジャリ」第33号、2017、6、親鸞仏教センター）

### 悪魔の凱歌

ユダたる大審問官へのイエスの接吻。だが実はこれも、イワンの思索が至った究極の到達点ではなかった。続いてドストエフスキイが示すのは、イワンがなおその先に創り上げた恐るべき場面、イワンの内深くに根差す悪魔の「否定の精神」が最後の発動をする場面である。

大審問官は牢獄の鉄の扉を開け、イエス・キリストを「町の暗い広場」へと解き放つ。

「行け、もう来るな・・・二度と来るな・・・絶対に、絶対に！」（五5）

イエスを追いやったこの大審問官について、イワンはこう語る。

「この接吻は老人の胸の内に焼きつけられていた。

だが彼は己の<sup>イデオ</sup>考えに踏み留まった」（五5）

この「だが」こそが、イワンの心の最深奥にある「常識」という名の「否定の精神」から常に送り出される常套語、あるいは伝家の宝刀であり、また長い間モスクワで繰り返された思索と自問自答の一切が行き着いた究極の一語であると言っても過言ではないだろう。「神の必要性という観念」に取り憑かれ、また地上に満ちる不条理への怒りと苦悩の虜と

なり、その不条理を飽くことなく生み出す人間への絶望と軽蔑に捕われ、「ホザナ！」への希求とその否定との間に揺れ続けたモスクワ時代。神についての証が「否定するには余りにも多く、確信するには余りにも少ない」（パスカル）この地上の現実において、イワンはなお人間と世界と歴史を凝視し、その中に「隠れたる神」を探し求め続け、遂に「神の言葉」たるイエス・キリストの存在とその十字架、「キリストの愛」に行き着いたのだ。しかしこの「キリストの愛」を大審問官への接吻の内に見事に描き切った直後の「だが」。この「だが」によってイワンは、自分自身を究極の「否定」の闇の内に投げ込んだのである。

### イワンへの、アリョーシャの接吻

「大審問官」の叙事詩の終局、神と「キリストの愛」を最終的に否定したイワンは、弟アリョーシャの抗議に対して、今や神なき自分が立つのは「カラマーズフの下劣さの力」であると宣言する。兄の「重い病」をはっきりと知ったアリョーシャと、イワンとの間で激しい応酬が繰り広げられる。兄への愛ゆえに、アリョーシャが投げかける激しく厳しい言葉にイワンは戸惑い、絶望と悲しみに捕われる。彼はアリョーシャの心が、この世に残された自分の唯一の「居場所」とであると信じていたのだ。「俺は、アリョーシャ、ここを去るにあたって、俺にもこの世界にせめてお前一人はいてくれると思っていた」「しかし今、お前の心にも俺の居場所はないことが分かった」（五五）。

この時である。突然立ち上がったアリョーシャはイワンに歩み寄り、その唇に自らの唇をそっと押し当てる。

「盗作だ！」（五五）

歓喜の情に駆られたイワンの叫びである。

「お前、俺の叙事詩から盗み出したな！ だが、有難う。

立て、アリョーシャ。出かけよう。お前も俺ももう出かける時だ」（五五）

一人孤独の内に福音書との格闘を続け、そこから掘り当てたイエス・キリストの接吻。その接吻の内に燃える愛の炎を、イワンは悪魔と共に「常識」の「だが」の内に封印してしまっていた。今その封印が、弟アリョーシャの接吻によって一瞬解かれたのだ。アリョーシャの接吻は、兄の「重い病」を見て取ったアリョーシャの已むに已まれぬ咄嗟の愛の表出だった可能性が高い。だがそれはイワンが十字架上のイエス・キリストの内に見て取り、大審問官への接吻として表現した「キリストの愛」を、そのままイワンその人に伝え返す接吻となり、師ゾシマ長老が説く「実行的な愛」を生きて表現する接吻ともなったのである。この青年の凍てついた魂は今、弟アリョーシャの接吻によって、再びこの荒涼たる地上世界における愛の可能性に目覚めさせられたのだ。「だが、有難う」—— イワンの

一瞬の「ホザナ！」である。振り子は否定から、再び肯定へと大きく揺れ戻ったのだ。

「だが」、これはイワンの新たな試練の始まり、より正確には恐るべき否定のドラマの「終りの始まり」であった。イワンの内なる悪魔、「常識」という名の「否定の精神」はこの青年に向かって、今叫んだばかりの「ホザナ！」に対して、これでもかとばかりに、またも新たなしかも決定的「否」を投げつける。スメルジャコフの登場である。この存在については、改めて正面から論じよう（「研究会便り」(8)～(13)）。

### 「地質学的変動」、「人神」思想の完成

悪魔が曝け出す若きイワンのモスクワでの思想遍歴。「大審問官」の叙事詩に次いで、その「否定の精神」が行き着く先はもう一つの叙事詩、「地質学的変動」である。千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説が十七歳の時、「大審問官」の叙事詩創作が二十三歳の時。我々はこれらの間に、恐らくは二十歳前後の頃に、イワンの福音書との出会いがあったと推測した。これらに対し「地質学的変動」は、悪魔が仄めかすところによれば、イワンがこの春、故郷の家畜追込町に帰る準備をしながら纏め上げたもの、あるいは念頭に置いていた思想である。悪魔はこれを叙事詩と呼ぶが、「大審問官」の叙事詩と同様に、実際にはこれが具体的に論文の形を持つものであったのか、あるいは彼の頭の中だけに存在する思想であったのかは明らかでない。またゾシマ長老との対決の場で言及される論文、「教会裁判論」に関する考察との前後関係も定かではない。しかし内容的にはこの「地質学的変動」の叙事詩想が、「大審問官」の叙事詩を踏まえ、二十四歳のイワンが成し遂げた思索の総決算と考えてよいであろう。彼はこの「地質学的変動」の人神思想を携えて帰郷し、それを密かに異母兄弟であり下男であるスメルジャコフにぶつけ、町の上流夫人たちの集まりで披露し、更にはゾシマ長老やアリョーシャとの対決に備えるなど、故郷での自らの思想実験の根拠とも武器ともしたと考えられる。悪魔が語るイワンの「地質学的変動」の思想を、以下に確認しておこう。

「彼らは全てを破壊して、人肉を喰<sup>くら</sup>うことから始めようと考えている。愚か者どもめ。この俺様に尋ねようともしないで！俺に言わせれば、何一つ破壊する必要などないのだ。人間の内にある神という観念を破壊しさえすればよいのだ。仕事に取り掛かるべきは正にそこからだ。そこから始めるべきなのだ。ああ、何一つ理解しない盲人どもよ！ひとたび人間が一人残らず、神を否定しさえすれば(その時は地質学上の時期と並行して必ずや来るに違いない)、その後は人肉など喰わずとも、自ずと旧来のあらゆる世界観や、そして何よりも旧来の道徳観の一切が崩壊し、新しきもの全てが到来するのだ」

「人間は、神のごとき巨人のごとき倨傲の精神によって自らを高め、人神が登場するであろう。自己の意志と科学によって、最早留まることなく自然を征服し、人間は

他ならぬそのことによって、かつて天上に繋いだ喜びにとって代わる、高らかな喜びを絶えず感じるようになるであろう。人間は誰もが、自分がやがて死んで復活などありはしないことを知り、神の如く誇らしげに冷静に、死を受け入れるようになるのだ。人間はその誇りから、人生が一瞬のものに過ぎぬとも嘆くにはあたらぬことを悟り、最早何の報いも求めずに、同胞を愛するようになる。愛は人生のほんの一瞬を満たすだけだ。しかし人がその刹那性を自覚しさえすれば、愛は、かつて死を超える永遠の愛を渴仰して燃え上がったのと同じくらい、激しく燃え上がることであろう」

「いったい何時、そのような時はやってくるのか。もしその時が到来すれば、一切は解決され、人類は最終的な安定を見るであろう。しかし人類に深く根差す愚かさを思えば、恐らく今後まだ千年は、その安定の到来はないであろう。それゆえ現在でも既にこの真理を認識している者は、誰でも全く好きなままに、この新しい原理に基づいて安定することが許される。その意味で彼には、《一切が許されている》のだ。そればかりか、たとえそういう時期が決して到来しないとしても、いずれにせよ神も不死も存在しないのだから、この新しい人間は、たとえ全世界に一人だけしかいないとしても、人神になることが許される。またこの新しい地位に就く以上、必要とあらば、かつて奴隷的人間が持ったあらゆる旧来の道徳的限界を、平然と踏み越えることも許されるのだ。神には法律など存在しない！ 神の立つ所、即ちそこが神の座だ！ 俺の立つ所、それが直ちに至高の座となるのだ・・・《一切が許されている》、これでけりがつくのだ！」（十一 9）

「肯定と否定」。モスクワで「神と不死」を求めるイワンが熱い心で仰ぎ見た肯定的価値の一切が、ここに百八十度否定的方向に逆転され、地上に引きずり降ろされたと言えよう。悪魔の「否定の精神」が、ここに完膚なきまでに言葉を与えられたのだ。「大審問官」の叙事詩の結末に続いて、振り子は最終的に完全に否定の側に振り切れたのである。

満を持して故郷家畜追込町に乗り込んだイワンが、この「全てが許されている」という人神思想の絶対的有効性と現実性を証すべく開始するのは、モスクワでの「神殺し」と「イエス磔殺」に続いての新たな神聖破壊。具体的には、修道院で沈黙と禁欲と祈りの内に「キリストの御姿」を守るゾシマ長老との対決と、異母兄弟スメルジャコフを「前衛的肉弾」としての父親フォードル殺した。「地質学的変動」において極限にまで煮詰められた論理は、現実世界において聖俗両極を代表する二人の否定と抹消という悪魔的試みとして具体化されるのである。アリューシャが「重い病」の内にいるとするイワンがここにいる。アリューシャが見つめるこのイワンとは、ドストエフスキイが人間の内に見つめる「否定の精神」、悪魔「ユダ」の姿そのものと言えよう。

### イワン(三). ユダ・イワンの帰郷と挫折

#### 帰郷、人神思想の挫折

神を否定し「キリストの愛」を斥けたユダ・イワンが、悪魔に導かれて行き着いた「地質学的変動」の叙事詩とその人神思想。だが実際に故郷に戻り、彼が乗り出した人神思想の有効性と現実性を試みる実験は、実際にはそう容易には進まなかった。帰郷と共にイワンが体験する「挫折」について、既に確認してあるものも含め、以下に三つの角度から追ってゆこう。

#### 挫折(1). アリョーシャとの対決

家畜追込町におけるイワンの「挫折」。その一つは、アリョーシャとの対決からもたらされる。故郷滞在の最後に至りイワンは、初めてアリョーシャと正面から向き合い、ゾシマ長老の下で「神と不死」を求めるこの弟との対決を試みる。我々はそれをつい今、「大審問官」の叙事詩を巡る二人の対決として目撃したばかりである。叙事詩の底に潜む「虚偽と欺瞞」を見抜かれ、敗北に終わったこの対決の最後にイワンは、アリョーシャの接吻によって心を震撼させられ、「ホザナ！」の瞬間を与えられたのであった。「だが」、彼が踏み出したのは、悪魔に導かれての新たな否定の道であり、弟と別れたイワンを迎えたのはスメルジャコフであった。イワンの帰郷の直後から「地質学的変動」の思想を伝授され、既にイワンをも凌ぐ巧緻と大胆さを以って「父親殺し」への道を突き進んでいたスメルジャコフは、イワンに最後の<sup>ゴ・サイン</sup>承諾を出させようと待ち構えていたのだ。二人の出会いと交流、そして「父親殺し」という<sup>ユダ</sup>悪魔の道を辿る彼らの「挫折」については、「挫折(3)」以降で検討しよう。

#### 挫折(2). ゾシマ長老との対決

帰郷したイワンのもう一つの挫折は、アリョーシャの師ゾシマ長老との対決によってもたらされる。実はこの対決は、アリョーシャとの対決の前日、「場違いな会合」において既に行われている。ここでイワンが喫した敗北の経緯について、以下に確認しておこう。

モスクワで神と「キリストの愛」を葬り去ったユダ・イワン、「地質学的変動」の思想を携えて帰郷した「人神」イワンが家畜追込町で目論んだのは、ロシア全土から崇拜者たちを集める聖者ゾシマとの対決であった。弟のアリョーシャも命を預け、既に一年間にわたりその下で修業を続けるゾシマ長老、「キリストの御姿」を守り続けるこの聖者ゾシマとの対決を、密かにイワンは仕組んでいたのである(二八)。

長老との対決は、人が犯した罪を裁く力と、その罪を最終的に赦し清算する力は何処にあるのか、国家であるのか教会であるのか、このことを巡る論争として展開する。イワンの主張は、教会が裁判権を握った場合に生じる問題を巡って展開される。その下に隠され

たのは刃、「地質学的変動」の思想家イワンが猛烈な毒を塗った「叛逆」の刃である。

イワンは罪人に対する裁きの至上権が、国家ではなく教会にあることを認める。だが彼は、そのことが持つ結果に疑義を呈するのだ。教会によって裁かれた人々、つまり「破門された人々」はどこへ行けばよいのか？「破門者」たちは人間社会からばかりか、キリストからも離れなければならないではないか？教会裁判権が持つこの根本的矛盾、あるいは危険性はどう解決されるのか？——このイワンは教会から、人間社会から、更にはキリストからも追放された罪人、つまり「破門者」の運命を心から気遣うイワンのように見える。だが逆なのだ。この疑義の背後にいるイワンとは、あの「キリストの愛」を斥けたイワンの遙か先にまで思索を推し進めたイワンである。つまりここにいるのは、「破門者」が究極行き着く「人神」の可能性について思いを馳せるイワンであり、「地質学的変動」の思想を刃として握るイワンに他ならない。

更にイワンは、教会が裁判権を握った場合に生じるであろう、もう一つの問題を指摘する。罪人における「良心の闇取引」の問題である。イワンによれば現代、罪人を裁く主体は教会ではなく国家である。この場合、罪人たちの良心は自分自身との「闇取引」が可能である。つまりたとえ罪を犯し国家から裁かれたとしても、彼らは自分がまだ教会から裁かれたわけでも遠ざけられたわけでもない、「キリストの敵」となってしまったわけではないと考え、密かにその良心を鎮めることが出来るであろう。だが国家に代わって教会が裁判を司るようになるや、罪人の良心に「闇取引」は不可能となろう。「キリストの愛から見放された」破門者は、最早どこにも行き場がなくなるからである。「キリストの敵」となってしまった人間が、この世に一人孤立したまま、なお自分を唯一正しい「キリストの教会」として立ち続けることなど、果たして可能であろうか？——この問いが隠し持つものもまた、激烈な「叛逆」の毒が塗られた刃である。至上の裁判権を持つに至った教会から、「キリストの愛」を取り上げられ、「キリストの敵」として締め出されてしまった「罪人」「破門者」たち。彼らの「行き場」は一体何処にあるのか？——これも一見、「罪人」「破門者」への気遣いを示す問いのように見える。だがその裏に潜むものとは、先の場合と同じく、「地質学的変動」の人神思想に他ならない。イワンは「罪人」「破門者」こそが、教会からもキリストからも神からも解き放たれ、この世に一人毅然と立ち、自らの足で歩む「新しき人間」となり得ることを高らかに宣言しているのだ。既に教会ともキリストとも神とも縁を切った人間には、最早善悪など存在せず、今や「一切が許されている」！

イワンは、修道院で勤労と精進と祈りの内に「キリストの御姿」を守る聖者ゾシマに向かい、モスクワで至った人神思想、その「倨傲の精神」を叩きつけたのである。

## 長老の反応

教会の裁判権を巡りイワンが展開した「破門者」論、更には罪人による良心の「闇取引」論に対して、ゾシマ長老が返す言葉は穏やかで静かなものであった。だがその内に隠されたものは、イワンが隠し持つ刃と毒を遙かに凌ぐ力を持ち、その「倨傲の精神」を打ち砕

き、そして癒す力さえ持つ「懼るべきもの」であることが、やがて判明するであろう。

長老がまずイワンに語り聞かせたのは「悪業への懲罰」についてであった。一線の踏み越えをした人間の良心に、神が罪意識を介して臨むこと、罪人への厳然たる神の裁きが存在すること、それが「悪業への懲罰」であり「キリストの律法」であること——長老はこれらのことを、イワンに諄々と説き聴かせたのである。長老はイワンが、「神と不死」の問題でなお「肯定と否定」の間を揺れ動く、未熟な「ロシアの小僧っ子」でしかないことを見て取ったのだ。「対決」が終わり、ゾシマ長老がイワンに対して贈った、励ましと祈りの言葉もここに挙げておこう。

「肯定的な方向に解決されない限り、決して否定的な方向にも解決されません。あなたご自身が、ご自分の心のこのような特性をご存知でしょう。そしてそこにこそ、あなたの心の苦しみの全てがあるのです。だがこのような苦しみを苦しむことの出来る崇高な心をあなたに授けて下さったことで、創造主に感謝すべきです。

《 高きを惟い、高きを求めよ。

我らが住まいは天にあり》（コロサイ書三2,1、ピリピ書三20）

神があなたの心の解決を、あなたがまだ地上にある内に、あなたにお与えなさるように。そして神がどうかあなたの道を祝福なさいますように！」（二6）

「肯定的な方向に解決されない限り、決して否定的な方向にも解決されません」。これはイワンがモスクワで積み上げた思想の全てを要約する言葉であり、彼が間もなくスメルジャコフと共に踏み込む「父親殺し」の挫折と、彼に臨む「悪業への懲罰」を予言するばかりか、やがて彼が至るべき真の故郷を指し示す予言となり、預言ともなるであろう。要するにイワンはこの対決に完全に敗北し、かつ長老の胸に迎え入れられたのだ。教会裁判権を巡るゾシマ長老との対決と、人神思想の挫折。翌日の「大審問官」を巡るアリョーシャとの対決と、「キリストの愛」否定の挫折——ドストエフスキイは、まずモスクワにおけるイワンの思索の足跡を正確に刻んだ上で、故郷の家畜追込町に向かわせ、ここでゾシマ長老とアリョーシャ師弟を介し、彼が積み上げた思想の一切を「挫折」に向かわせるのだ。悪魔の「否定の精神」を見据える作者の眼と、作品構成の的確さは驚くべくものである。

### 挫折（3）. スメルジャコフとの出会いと交流

帰郷したイワンが体験する「挫折」。それはゾシマ長老との対決から、そしてまたアリョーシャとの対決から与えられるものであることが明らかとなった。だがイワンの人神思想が会う最大の挫折は、彼のスメルジャコフとの出会いと交流から与えられるであろう。それは「父親殺し」を巡って、二人の間に生じる「擦れ違い」の結果として生じるものであるが、この擦れ違いとは二人の生と思想そのものから生じる違いであり、我々はここに焦点を絞ることで、イワンとスメルジャコフという『カラマーゾフの兄弟』における最も

暗く深い闇の淵に測鉛を降ろし、その淵に潜む悪魔の「否定の精神」に僅かでも光を当てることが可能となるのではないか。そしてこのことは、福音書が闇の中に留めてしまった問題、我々が課題とする「聖なるもの」を踏みにじって裏切る「人間の中の悪魔性」と、その罪意識の問題へのアプローチにもそのまま繋がるものではないか。このような見通しの下に、最後に帰郷後のイワンについて、殊に彼とスメルジャコフとの出会いと交流について見てゆこう。

### スメルジャコフへの興味

帰郷して間もなく、イワンが何よりもまず惹き付けられたのは彼の異母兄弟、カラマーゾフ家の料理係として働く下男、スメルジャコフであった。イワンは直ちにこの「一風変わった」人物に目を止め、彼が自分に近づいて話をするよう、自ら進んで仕向けさえするのであった(五六)。その後二人の間で何が起こったのか。このことを鮮やかに伝えてくれるのは、イワンとの永遠の別れの直前、スメルジャコフがする次のような回想である。

「[自分が父親のフォードル殺しに至ったのは]《一切が許されている》と考えたからです。このことは本当にあなたが教えて下さったのですよ。あなたはあの頃色々とお話をして下さいました。というのも、もし永遠の神がいなければ、いかなる善行もありはしない、そもそも善行など何の必要もないのだと。あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」(十一八)

理不尽で醜悪な運命への怒りと呪いに憑かれ、一人片隅から世界に白い眼を剥くのがスメルジャコフであった。(スメルジャコフについては、「研究会便り」(8)～(13)で、その生と思想との詳細な検討をしよう)。このスメルジャコフの孤独の中に、突如現れたのがイワンであった。人間を縛るものなど何もない、良心も善行も、そして神さえも。「一切が許されている」——イワンの「地質学的変動」の人神思想が、青天の霹靂のようにスメルジャコフの心を打ったことは想像に難くない。その後の二人の間に生じた熱気は、上のスメルジャコフの回想が何よりも雄弁に物語るところである。

### 熱気の変質、行き当たった「自尊心」

出会いの感動から、人神思想の伝授へ。だがこの熱気の中で、やがてイワンは、スメルジャコフが示す思考の「支離滅裂さ」というよりは、その思考の「落ち着きのなさ」に突き当たる。時間の経過と共に、当初の「一風変わった」下男への興味は次第しだいに薄れ、この下男への厭わしさがイワンの心を占めるようになってゆくのだ。モスクワにおいて孤高の思想青年であったイワンが、故郷家畜追込町に戻るや、その異母兄弟かつ下男であるスメルジャコフに対しては、横暴な「若旦那」としての心を不用心にも曝け出してゆく。ドストエフスキイのリアリズムの筆が浮き彫りにする、イワンの隠れた側面である。

さてスメルジャコフが投げかける「何か遠回しで、明らかに考え抜かれた質問」の捉え難さに、イワンはますます苛立たされてゆく。こればかりではない。イワンは、この異母兄弟が駆り立てられている「執拗な不安」に目を見張らされ、その奥に蠢く「測り知れぬ自尊心」に、更には「傷ついた自尊心」の存在にも気づき、遂には「嫌悪感」を感じさせられるまでに至るのである（五六）。

「罪なくして涙する幼な子」の存在に涙するイワンが、そしてそのことで神を否定し、神の世界を弾劾するイワンが、自分の目の前にいる異母兄弟で下男であるスメルジャコフこそが、正にその「罪なくして涙する幼な子」たちの一人であることに気づかず、しかもこの下男の内に疼く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」に行き当たるや、「嫌悪感」と共に彼から距離を置き始めてしまう。作者ドストエフスキイは、この青年がその心の最深奥に抱える秘密、あるいは病弊を、ここにはっきりと暴露したのだ。それを悪魔の「否定の精神」と呼ぶことも出来よう。「常識」から発される「だが」の精神とも呼び得るであろう。我々はそれがイワン自身の内に潜む「倨傲の精神」であり、ぬくぬくと守られてきた彼自身の「自尊心」だと考えたい。ここに明らかとされたものとは、「天使」と言われる弟のアリョーシャが気づかず、また聖者ゾシマさえもが気づくことのなかった、イワンの心の最深奥に潜む病弊であり、「倨傲の精神」と結びついた「自尊心」以外の何ものでもないだろう。

「自尊心」は人間の存在の根とも言うべきものであり、必ずしも否定されるべきものではない。「自尊心」の崇高な発露もあり得るのだ。だが下男の「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」に気づいても、その「傷」には一切眼を向けようとせず、ただ「嫌悪感」に捕われるだけのイワンは未熟であり、「倨傲の精神」と結びついたその「自尊心」は、小さく醜い。先に見たように、アリョーシャを前にして、そしてゾシマ長老を前にして、イワンの未熟さを露呈させ、その人神思想の挫折を描くドストエフスキイの筆は、イワンに対する愛情の籠ったものであったと言えよう。だがスメルジャコフを前にして、ドストエフスキイがイワンの未熟さを露呈させ、そこから彼を決定的な挫折に向かわせる筆は、前二者と比して桁外れに残酷であり、容赦がない。

### 主従関係の逆転

さて『カラマーゾフの兄弟』における「父親殺し」のドラマを辿る中で、我々が突き当たり困惑させられる大きな壁、あるいは謎がある。それは下男スメルジャコフを「前衛的肉弾」として、イワンが推し進めたのかと思われる「父親殺し」の計画が、具体的には何時、誰により、如何にして立てられたのか、実際には何処にも明白には記されていないということである。恐らく「父親殺し」の計画とは、イワンが立てたものではなく、イワンの内に蠢く願望をスメルジャコフが敏感に察知し、自らが抱く運命への復讐心と重ね、そこから進めた「計画」だったと考えるのが自然であろう。この推測を裏付ける手掛かりも、曖昧ではあるが少なからず存在する。だがそれら「暗黙の合意」劇の検討は措いて、つい

今我々が見た「大審問官」朗読に続く、イワンの行動にもう一度戻ろう。ここに示されるのは、既にいつの間にか進行していた主従の逆転劇が完成する場であり、言い換えればイワンの挫折の運命が逃げ場なく明らかとなる現場である。

アリョーシャの接吻に心を揺り動かされたイワンが、この弟と別れて家に戻るや、待ち構えていたのはスメルジャコフであった。イワンはこの下男から、「父親殺し」への最終的な「ゴー・サイン」を迫られ、最終的に承諾に追い込まれてしまう。しかしここにおいても二人は、「父親殺し」自体については一切口にしない。まるで二人の間には、このことでは沈黙を守ろうとの「暗黙の合意」が存在するかのようになり、一貫して事は進むのである。

ドストエフスキイの筆によって次々と描き出されるイワンの姿は、悲劇的であり悪魔的であり、そして喜劇的でさえある。読者には、裁判の直前までイワンが、スメルジャコフの仕組んだ殺人劇の全貌も細部も、それへの自らの加担の程度も、ほとんど何も把握し切れぬままで見えるかのように見えるのだ。モスクワ帰りの若旦那イワンの「一切が許されている」とする人神理論は、運命への怨念を胸に秘める下男スメルジャコフに、その復讐劇への理論的根拠を与え、また父親フォードルへのイワン自身の嫌悪感の高まりと共に、「最後の一步」に向けて「前衛的肉弾」の背を押したことはまず間違いないであろう。だがいざスメルジャコフが実行に向けて始動し始めるや、イワンの心には怯えと躊躇が生じ、密かな興奮の一方で、自分は何も知らないかのような態度を取り始めるのだ(五六)。そればかりでない。イワンは実際に父親が殺害された後でさえ、自分の内に存在していた父親への殺意さえ忘れてしまったかのように、スメルジャコフに的を外れた質問を繰り返すのである(十一・六・七・八)。下男が「前衛的肉弾」として一人先を歩み、若旦那は遠く置き去りにされる。いつの間にか、主従関係は完全に逆転してしまったのである。

イワンがスメルジャコフに「父親殺し」への「ゴー・サイン」を出した、否、出すよう仕向けられた翌日のことだ。故郷を去り、汽車でモスクワへと向かうイワンの心を支配していたのは、煩わしさの一切から身を引き剥がすことが出来たという安堵の気持であった。だが間もなくこの解放感は消え失せ、深い闇に覆われた彼の心の内では、生涯初めて味わう痛切な「憂愁」が疼き始めたことと記される。

「俺は卑劣だ！」(五七)

イワンが発したこの言葉こそ、モスクワに始まった「神と不死」に関わる思索とその実験が、結局どこに行き着いたかを何よりも雄弁に物語るものであろう。自らが「神」であることを証すべく故郷に帰った彼は、唯一「卑劣さ」の自覚を土産に、モスクワへと逃げ帰ったのである。

### ユダ・イワンへの召喚状

モスクワに逃げ帰ったイワンを追って、直ちに「父親殺害」の知らせがもたらされる。

ユダ・イワンへの召喚状である。再び故郷に戻ったイワンが開始したこととは、スメルジャコフの許を訪れ、何が起こったのか、一体お前は何をしたのか、そして自分自身は何をしたのか、これらのことを問い質すことであった。ここに新たに始まるドラマは、喜劇から次第しだいに悲劇的悪魔的相貌を帯びた二人の対決劇へと移行してゆくであろう。血の一線を踏み越えた人間の良心に、罪意識を介して臨む神の裁き、つまり「悪業への懲罰」が開始されるのだ。ゾシマ長老がイワンに語ったこの言葉はイワンが、そしてスメルジャコフがその後辿る運命を正確に予言するものであったことが明らかとなる。二人がこれから辿る「悪業への懲罰」のドラマ、これこそ『カラマーゾフの兄弟』後半の圧巻と言うべきものである（十一・六・七・八）。ここでドストエフスキイの筆は、父親を殺害した二人の罪人が、それぞれ自らの罪を如何に自覚し、その罪意識を介して臨む「活ける神」と如何に向き合うかのドラマを、一点の誤魔化しもなく描き出すであろう。

### 「悪業への懲罰」

だが「悪業への懲罰」のドラマとは、これら二人が「父親殺し」の後に追い込まれるドラマのみではない。既に出会いの時点から、二人は「地質学的変動」の人神思想を介し、「ユダ」としての道を歩み出していたのだ。そればかりではない。今回我々は、モスクワにおけるイワンの思索の足跡について、順次「肯定」と「否定」の両面から光を当てたのであるが、そこから明らかになったこととは、「神と不死」を熱烈に求める「ロシアの小僧っ子」イワンの内には、既に悪魔の「否定の精神」が根深く宿っているということであった。つまりイワンの内には「常識」という名の「否定の精神」、あるいは文字通り「倨傲の精神」が潜み、それは彼が「肯定」と「ホザナ！」を求めれば求めるほど、それとは逆の方向に彼を導いてしまったのだ。このように「肯定」と「否定」の間で悪しき往還を繰り返す自分について悪魔は、（と言うことは即ちイワンに他ならないのだが）、自分の存在感が希薄となり、自分がまるで「不定方程式のX」のようになってしまったと正直に告白もするのである（十一・九）。

「僕は苦しんでいる、だが生きていない。僕は不定方程式のXだ。僕は何か人生の幻影のようなもので、全て始めも終わりもなくしてしまった。そして自分を何と呼ぶのか、遂には自分の名前まで忘れてしまった」（十一・九）

モスクワのイワンも「ユダ」であり、ここにおいても既に「悪業への懲罰」は臨んでいたのだ。

モスクワから家畜追込町に呼び戻されたイワンは、既に何度も言及したように、この後スメルジャコフとの間に二か月間、三度にわたる対決を繰り返すであろう。だが既に主従関係が逆転した二人の間に、正面からの「対決」は成り立たない。イワンは下男に軽蔑

され嫌悪されつつ、結局はこの下男によって自らの罪の最終的かつ決定的な自覚に導かれ、神との出会いを果たすであろう。「だが」、その直後、彼は下男スメルジャコフの自死を予感しつつも、彼の許を去ってしまう。「父親殺し」の罪を最終的に自覚させられた直後の、「兄弟殺し」である。イワンの内なる悪魔は、翌日法廷で彼が己の罪を自白し、その人格を最終的に解体させ、「死の床」(「エピローグ」でアリョーシャが語る言葉である)に沈んで初めて、彼の許を去るであろう。人格を解体させ、「死の床」に横たわるイワンの内に、最早悪魔の「行き場」はないのだ。イワンのドラマとは、スメルジャコフのそれと共に、そのどこを取っても「ユダ」のドラマ以外の何ものでもない。

書かれずして終わったこの作品の後篇にも、一瞬目を向けておこう。後篇において、我々読者に予想されるのは、たとえイワンが「死の床」から再び立ち上がることを赦されたとしても、彼を待ち受けるのは「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」と「兄弟殺し」という、何重もの十字架を背負ってのゴルゴタへの道、想像を絶する過酷な生以外の何ものでもない。だが作者ドストエフスキイは、作品の終わり近くの「エピローグ」で長兄のドミートリイに、イワンの未来について次のような予言をさせているのだ。

「聞け、兄弟イワンは全員を超える。生きるべきは彼で、俺たちではない。彼は回復する」(エピローグ2)

『カラマーゾフの兄弟』の前篇を書き終えてから約二か月後、ドストエフスキイはこの世を去る。作者ドストエフスキイは、この「回復する」イワン、「死の床」から立ち上がることを赦され、新たな光の内に歩むイワンを描くことなく、その生涯を終えたのだ。「神殺し」、「イエス磔殺」、「父親殺し」、そして「兄弟殺し」——「ユダ的人間論」の長大なドラマと、これから担うべき十字架が残されたのみであり、イワンに関する「キリスト論」のドラマは書かれずして終わったかのように見える。「だが」、既にこの不幸な青年は、やがて彼の上に臨むであろう光を十分に予感させるほど、我々にその闇と、その内に潜む病弊を曝け出して見せてくれたのである。

## おわりに

ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の冒頭エピグラムに置いた、ヨハネ福音書の「一粒の麥」の死の譬の検討から始まった我々の作業は(第1章、「研究会便り(5)」)、イエスを裏切って十字架の死に追いやり、逃げ去ってしまった弟子たちの、その後の罪意識の帰趨を追うことへと進んだ(第2章、「研究会便り(6)」)。しかし我々には新約聖書の大部分が、輝かしい「キリスト論」の陰に、「ユダ的人間論」の方は覆い隠してしまったように思えたのであった。その一方でパウロの書簡が表わすものとは、見事に十字架に焦点を絞った思索であり、彼がイエスの「十字架の死」を核にその思索を深めていることを、

我々は驚きと共に確認したのであった。だが十字架以外、イエスの具体的生には目を向けない彼の思索の深さは、逆に抽象性と象徴性の深さと呼応するものであり、我々の心に収め切ることは容易ではないと思われた（同上）。次に我々が向かったのが、ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』である（第3章「研究会便り（7）」）。パウロの思索が持つ「キリスト論」と「ユダ的人間論」とを共に、具体的な人間ドラマとして徹底的に描き出したのがこの作品であると考えからである。殊にドストエフスキイが「ユダ的人間論」を極限にまで煮詰め、具体的かつ徹底的に表現したのが、悪魔の「否定の精神」に支配されたイワンであり、スメルジャコフであると言えるであろう。

我々はこの悪魔の「否定の精神」を内に宿すイワンを「ユダ」として捉えた。事実今まで見てきたように、それはやや駆け足の検討と言わざるを得ないのだが、イワンの生と思索の足跡は、モスクワ時代も、故郷の家畜追込町で「父親殺し」に至るまでの数か月間も、その後裁判の場における罪の告白までの二か月間も、そしてまた人格解体の末のいつまでと知れぬ「死の床」も、全てが「ユダ的人間論」の視野の内に捉えて初めて、その意味の奥行きを十全に開示するものと思われるのである。またこの「ユダ的人間論」の角度から見ることで、逆にイワンを「キリスト論」的角度から見る視野も開けてくるであろう。それが最後に見たドミートリイの予言である。

我々は『カラマーゾフの兄弟』を聖書的磁場の下に置くことで、イワンとスメルジャコフ二人の異母兄弟を、新約世界の弟子たちに重ね、その師への裏切りと十字架磔殺、それに続く罪意識の帰趨を追う手掛かりと考えることが可能となると考える。本論はこの視点の確保を最大の課題とするものであったことを、ここに改めて確認しておきたい。

最後にスメルジャコフについても記しておこう。

何度か言及してきたことであるが、『カラマーゾフの兄弟』において、イワンよりも更に過酷な運命を強いられて生きるのが、彼の異母兄弟でありカラマーゾフ家の下男として働くスメルジャコフである。この作品の最大の「ブラック・ホール」たるスメルジャコフ、イワンが凝視する「罪なくして涙する幼な子」の正に一人たるこの青年は、その内に理不尽で醜悪な運命への怒りと呪いの心を抱え、万人万物一切への復讐心に貫かれた悲劇的悪魔的存在である。しかも彼がその内に蓄えた聖書知識の豊かさは驚くべきものがある。このスメルジャコフを十全に理解することは容易でない。イワンについて検討してきた我々は、この存在についても、まずは「ユダ的人間論」の角度から徹底的に検討する必要があると考える。そのことによって初めて、悲痛な自己聖絶に終わるこの青年の生と死の全ては、「キリスト論」の内にも収め取られ得るのではないか。次回からは六回にわたり（「研究会便り」（8）～（13））、このスメルジャコフの生と死の検討に取り組みたい。

（了）

## 《参考文献》

- ★本論の「ユダ的人間論」と「キリスト論」、そして「相互磔殺」の概念、十字架に対する罪意識の問題、光と闇の問題等に関して、筆者が常に「思索の参照枠」とさせて頂いてきたのは、以下の六書である。
  - ・小出次雄『基督教的空間論としての ゴルゴタの論理』[1949]（驢馬小屋出版、1984）。
  - ・西田幾多郎『場所的論理と宗教的世界観』（『哲学論文集 第七』）岩波書店、1946
  - ・小林秀雄『カラマアゾフの兄弟』[1941-2]（改定版）小林秀雄全集・6、新潮社、1978
  - ・R.オットー『聖なるもの』[1917] 山谷省吾訳、岩波書店、1968
  - ・南原実『極性と超越 —ヤコブ・ベーメによる錬金術的考察』新思索社、2007
  
- ★新約聖書学の角度から分析されたユダ、並びに弟子たちの裏切りの問題、またイエスの十字架を巡る問題等については、主に以下の書物を参考にさせて頂いた。
  - ・佐藤研『悲劇と福音 —原始キリスト教における悲劇的なるもの』清水書院、2001
  - ・荒井献『ユダとは誰か —原始キリスト教と『ユダの福音書』のユダ』岩波書店、2007
  - ・同『ユダのいる風景』岩波書店、双書 現代のカルテ、2007
  - ・同『荒井献著作集・第三・四・五・八巻』岩波書店、2001
  - ・佐竹明『新約聖書の諸問題』新教出版社、1977
  - ・同『使徒パウロ—伝道にかけた生涯』NHK ブックス、1981
  - ・八木誠一『パウロ』清水書院、人と思想 63、1980
  - ・大貫隆『イスカリオテのユダ』日本キリスト教団出版局、2007
  - ・同「ユダとイエス ユダの福音書に寄せて」東北学院大学キリスト教文化研究所紀要、第二十七号、2009
  - ・同『イエスという体験』岩波書店、2003
  - ・同『イエスの時』岩波書店、2007
  - ・青野太潮『「十字架の神学」の成立』ヨルダン社、1989
  - ・同『「十字架の神学」の展開』新教出版社、2006
  - ・同『「十字架の神学」をめぐって』新教出版社、2011
  - ・同『パウロ—十字架の使徒』岩波書店、2016
  
- ★師イエスを裏切り、十字架に追いやった弟子たちの苦悩と悲しみ、その罪意識に焦点を絞り、見事な歌詞と音曲とが一つになって展開するバッハの受難曲は、「ユダ的人間論」の典型的かつ具体的な表現として、恐らく『カラマアゾフの兄弟』と比肩する位置を占めるのではあるまいか。
  - ・バッハ「マタイ受難曲」BMW244、1727
  - ・同「ヨハネ受難曲」BMW245、1724
  
- ★新約聖書からの引用は、文章の格調高さの点で文語訳を選んだが、他のものも参考にさせて頂いた。
  - ・日本聖書協会『舊約新約聖書』（文語訳、1967）

- ・佐藤研編訳『福音書共観表』（岩波書店、2005）
- ・田川建三『新約聖書 訳と註』（1-6、作品社、2007-2013）
- ・ネストレ・アーラント編『ギリシヤ語新約聖書、二十七版』（Deutsche Bibelgesellschaft, 1993）

★『カラマーゾフの兄弟』については以下のものを用い、引用部分は筆者が訳出した。

- ・アカデミー版ロシア語三十巻本全集、第14・15巻（レニングラード、ナウカ社、1976）

★本論と関係する筆者の主な論考・著作は、以下の通りである。

- ・芦川進一「ドストエフスキイにおけるイエス像」大貫隆・佐藤研編『イエス研究史』所載、日本基督教出版局、1998
- ・同『「罪と罰」における復活 — ドストエフスキイと聖書 —』河合文化教育研究所、2007
- ・同『ゴルゴタへの道 — ドストエフスキイと十人の日本人 —』新教出版社、2011
- ・同『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』河合文化教育研究所、2016

★イワン関係の芦川の主な論考は、上の拙著『カラマーゾフの兄弟論』以外に、以下の通りである。これら相互の関係については、最後に《本論成立の経緯》の中に記してある。

- ・「アリョーシャとイワンの聖書 — モスクワ時代、イエス像構成の一断面 —」（講演記録、早稲田大学ロシア文学会主催、2014）
- ・「ドストエフスキイと現代 — アポカリプスの予言とその行方 —」（雑誌『キリスト教文学研究』所載、33号、日本キリスト教文学会、2016）
- ・「イワン・カラマーゾフのキリスト — 「大審問官」、福音書からのアプローチ —」（ドストエフスキイの会編『広場』第26号所載、2017）

## 《付記》

ユダの問題に関しては、日本において既に半世紀以上前に正面から光を当て、「相互磔殺」の概念を核として、イエス・キリストの出来事全体を強固な論理の内に捉える試みが哲学者小出次雄によってなされ、極めて高いレベルで完成を見ている。小出は京都大学の西田幾多郎の下で哲学を、波多野精一の下で宗教学を学び、また祖父以来のプロテスタント信仰に立ち、静座体験と様々な芸術体験、更にはR.オットーの『聖なるもの』を土台とし、アカデミズムの世界からは離れた場に立って哲学的・宗教的・芸術的思索と創作を展開し、その集大成として終戦直後の1949年に、論文「基督教的空間論としての ゴルゴタの論理」を著わすに至った（驢馬小屋出版、1984）。筆者（芦川）は『ゴルゴタへの道』において、小出の「相互磔殺」の概念を取り上げ、続いて『カラマーゾフ

の兄弟論』においても、「ユダ的人間論」の問題、また十字架を前にした人間の罪意識とその清算の問題に関して、ゾシマ長老の「悪業への懲罰」論を核として、イワンとスメルジャコフの罪と罰のドラマを追ったのであるが、その際に考察の主な土台としたのは、小出の上記論文と西田幾多郎の最終論文（「場所的論理と宗教的世界観」1945）、そして小林秀雄の「カラマアゾフの兄弟」（1941-2）である。注目すべきことに、これらは奇しくも全て太平洋戦争の末期、終末論的状况にあった日本でなされた、ドストエフスキイとイエスの正面からの対決の記録と言えるであろう（上記拙著『ゴルゴタへの道』）。日本の宗教・哲学・思想・文学・芸術の流れの中に、これら先哲の思索を始めとして、聖書とドストエフスキイがどのように受容され対決されてきたかを明らかにし、また今後如何にこれらの問題と取り組んでゆくべきかを考えることは、我々に残された大きな課題である。

### 《本論成立の経緯》

本論の基となった考察について、また関連する考察について以下に記しておく。2015年5月5日、上智大学で開催された日本キリスト教文学会創立50周年記念シンポジウム；「ドストエフスキイと現代 — アポカリプスの予言とその行方」において、筆者はパネリストとして『「一粒の麥」の死の譬え — 『カラマアゾフの兄弟』のユダ的人間論 —』という題目で問題提起をした。このシンポジウムでの発表は、既に書き上げてあった『カラマアゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』を基に、ユダに関する考察を加えてなされたものであるが、その後この発表を土台とし、改めて「一粒の麥」の死の譬えとユダについて、またこれにイワンについての考察を加え、同じタイトルの下に論文として書き上げたものが『キリスト教文学研究』に収録された（第33号、創立50周年記念号、日本キリスト教文学会、2016年5月9日）。

『カラマアゾフの兄弟論』からシンポジウムでの発話へ、そして学会誌への論文化から、改めてこの「研究会便り(5)(6)(7)」へ。本論はこれら四段階の考察の結果に、更に河合文化教育研究所のHPを整理する際、一部加筆修正をしたものである。

ここに至るまでにはシンポジウムでの発話から始まり、文体も大きく変化している上に、内容的な面でも重点が少しずつ移動してきている。また取り上げたテーマは、聖書世界とドストエフスキイ世界とに跨る大きな問題であり、聖書世界についての分析を始めとし、この考察が今回を以って終了したということはありません。取り組みは更に続けられね

ばならないだろう。

なお2016年3月19日、筆者は「ドストエフスキイの会」の第232回例会において「悪魔が明かすモスクワのイワン —「ロシアの小僧っ子」が辿った「神と不死」探求の足跡 —」という題目で、拙著『カラマーゾフの兄弟論』を基に、イワンについての考察を報告した。これを文章化したものが、同会の会報誌『広場』第26号に掲載された。その際タイトルも「イワン・カラマーゾフのキリスト —「大審問官」、福音書からのアプローチ —」と変更した（ドストエフスキイの会編『広場』第26号所載、2017）。これはモスクワにおけるイワンの思索の跡を辿るにあたって、主に彼の「大審問官」の叙事詩における聖書との取り組み、殊にイエス・キリスト把握の問題に焦点を絞ったものである。今回の「研究会便り(7)」においては、この『広場』のイワン論と、また拙著『カラマーゾフの兄弟論』とも、一部だが記述が重複することをお断りしておく。認識の重なるところを、わざわざ記述を変えてまで表わす必要を感じなかったからである。

またイワンについては、筆者は2014年に「アリョーシャとイワンの聖書 —モスクワ時代、イエス像構成の一断面 —」というタイトルの下に講演を行っていて（早稲田大学ロシア文学会主催、2014）、これは河合文化教育研究所HPの「ドストエフスキイ研究会便り(3)」に掲載されている。次ページの「次回、研究会便り(8)」についても参照されたい。

恐らくイワンという青年は、ドストエフスキイが自らの「神と不死」探求における試行錯誤の全てをそこに投げ込んだ人物であり、我々がドストエフスキイについて、その「神と不死」の思索について、またイエス・キリストや神について考えようとする際に、ゾシマ長老やアリョーシャと表裏一体の形で、この上なき良き伴走者となってくれるであろう。だがこのイワンの全貌を理解し、言葉に表現することは決して容易ではない。筆者が繰り返しイワンと取り組まざるを得ない理由もここにある。だが本論でも記したように、我々の内なる「神」という観念、あるいは「神の必要性という観念」の不思議と真摯に向き合い、それと命懸けで取り組み、やがて没落してゆくこの「ロシアの小僧っ子」の姿は、「神も仏もない」ままに、平然かつ安穩と頹落した日常を生きるように見える現代の我々日本人にとって、この上ない魂の「教師」あるいは「反面教

師」としての役割を果たしてくれるに違いない。この「研究会便り」に触れられた皆さんも、是非自分自身の角度からイワンと取り組み、自らのドストエフスキ理解を深め、そこから人間と世界と歴史に向かう確かな視野を獲得して頂きたいと思う。

2017年3月

2018年12月一部加筆修正

### **次回、研究会便り(8)について**

次回(8)から(13)に至るまで、六回にわたり「カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々 —」という題名の下に、この作品における「ブラック・ホール」とも呼ぶべき存在、スメルジャコフの生と死について、イワンやドミートリイ、そしてアリョーシャとの係わりの中で、広く考えてゆく予定です。